学輪 IIDA 共通カリキュラムフィールドスタディ 2023

遠山郷エコ・ジオパークフィールドスタディ報告書

令和 5 年 9 月 16 日（土）～18 日（月・祝）

目　　次

各種動画 QR　・・・P1

事業概要　・・・P2

カリキュラム　・・・P6

参加者名簿　・・・P7

実施後アンケート　・・・P8

感想レポート　・・・P17

各種動画 QR

2023 年度フィールドスタディ本番の様子（9/16-18）

動画 QR

■環境教育・ESD 実践動画 100 選（環境省）応募動画

制作：松本大学田開ゼミ（応募：学輪 IIDA 共通カリキュラム実行委員会遠山郷分科会）

事前学習①【全体学習会（全２回）】

動画 QR

■第１回(7/2)

「～調査研究の「プロセス」に触れる～『坂本正夫物語』」

講師：飯田市美術博物館　坂本正夫先生

「南アルプスエコパーク／南アルプスジオパークって何？」

講師：飯田市美術博物館　四方圭一郎先生

飯田市美術博物館　坂本正夫先生

「地域の魅力を伝えるインタープリテーション講座（導入）」

講師：鶴見大学短期大学部　増田直広先生

■第２回(7/21)

「遠山谷の歴史と文化を知ろう！」

講師：飯田市美術博物館　近藤大知先生

「遠山郷の地域づくりと現状」

講師：飯田市上村公民館　原澤泰知主事

事前学習②【コース別学習会（全４コース）】

動画 QR

■自然コース(9/7)

「北極とヒマラヤの自然がであう遠山谷」

講師：飯田市美術博物館　四方圭一郎先生

■民俗学コース(9/6)

「遠山谷の民俗調査から -林業を中心に-」

講師：飯田市美術博物館　近藤大知先生

■動物倫理コース(9/5)

「動物と人間のあいだ」

講師：東京農工大学　大倉茂先生

飯田市立動物園　水野慎二さん

■☆とクレーターコース(①7/27、②8/24、③9/8)

①「隕石は宇宙からの手紙」

講師：国立天文台　大石雅寿先生

②「南アルプスはどのような地質でできているのだろうか」

講師：飯田市美術博物館　坂本正夫先生

③「現地巡見計画づくり」

講師：飯田市美術博物館　坂本正夫先生

国立天文台　大石雅寿先生

学輪 IIDA 共通カリキュラム実行委員会　共通カリキュラム（フィールドスタディ）
2023 遠山郷エコ・ジオパークフィールドスタディ　企画書

１．はじめに

これまで遠山郷エコ・ジオパークフィールドスタディ（以下、遠山郷 EG-FS）では、「エコパーク、ジオパークを舞台に、聞き取り調査や体験活動を行い、地域資源の価値や活用方法について議論する」*ことを進めてきた。

2020 年度と 2021 年度は、新型コロナウイルス感染症の影響で、遠山郷の地域住民や高校生や大学生などが、オンラインを通じてインタビュー調査を行った。調査は制約があったが、実際の経験談や被害状況の詳細などが含まれ、内容が濃かった。また、2021 年度の事前学習からは、学芸員や公民館主事の皆さんのご協力のおかげで充実した内容となり、遠山郷をフィールドに研究調査を行う専門家や学芸員のお話はリアリティに満ち、参加者は楽しく興味深く遠山郷の自然や文化を学ぶことができた。なお、オンラインやオンデマンド配信を行い、対面、同期、非同期による「ハイフレックス」な学びの機会を提供することで、より柔軟な学びの形が可能になり、参加者が自由に学びを進めることができた。

2022 年度は引き続き新型コロナウイルスの影響により制約があったものの、現地での対面調査を再開することができた。現在の調査テーマには、若い人を含めた多様な人々がフィールドワークに関わるスタイルが現れており、こうした交流が地域の活動につながる可能性も見えてきた。また、最終日の地域成果発表会には多くの参加者が集まり、充実した活動になっている。今後は、高校生や大学生が地域に関心を持ち続けるために、継続的な研究調査や社会活動をどう促すかが課題としてある。

こうした成果を踏まえて、今年度は遠山郷 EG-FS の教育効果や地域への波及効果を向上するため、事前学習の充実化、参加費の検討、アドバンストコースの設置などについて審議をお願いしたい。なお、今年度も事前学習にはオンラインを活用し、市内外からの参加者の交流を促進し、さまざまな視点から地域資源の価値や活用方法について議論を深めたい。最後に、遠山郷 EG-FS を通して地域にどのような成果が得られるかについて引き続き検討していきたい。

*＜遠山郷 EG-FS の目的＞

持続可能な社会を実現するためには、人々が暮らし・働く地域社会そのものが持続可能でなければならない。急激な開発や過疎化によって衰退しつつある地域社会が、そのコミュニティとしての価値を再評価する方法について考える。この Field Study では、エコパーク、ジオパークに認定されている遠山郷（上村・南信濃）の自然資源に注目し、地元の専門家の案内を受けながら観察と記録を行い、その価値や活用方法について議論する。

＜到達目標＞

・長野県飯田市のまちづくり及び遠山郷（上村、南信濃地区）という特定の地域における地域資源の価値と活用方法を学ぶ。
・大学生と高校生との共学による学習効果を高める

【確認事項】（昨年度のねらいなどの引き継ぎ事項を含む）

■ねらい

・基本的な意義として「自然環境との共生による持続可能な社会の実現」に向けた遠山郷 EG-FS

・そのような社会を担っていく人に必要な視点や考え方を身に着けるための遠山郷 EG-FS にしたい

■学びの要素

① 自然環境と人の営みの関係性を捉える（いのち・環境・人間）

＊物事を考えるときに置き去りにされがちな視点であり、この FS の考え方の基礎

② 遠山郷に育まれてきた様々な「資源」を捉える（固有性・魅力）

＊①を押さえて初めて観えてくるものがあるはず

③ どのように①を守りつつ②を活用することができるのかを考える（手段）

＊①と②の紐づけがしっかり落ちてないと、薄っぺらいものになりがち

■学びを深めるための方法

・ 遠山郷の地域資源、地域課題、そして地域活動について、まずは「事前学習」を通じて理解する。次に、地域で起こっている問題を自らの問題として捉えるために、事前学習の専門科目や「フィールドスタディ」（2 泊 3 日の調査本番）において、参加者自身がテーマや方法を主体的に決定することが求められる。ただし、当日初めて集まってグループ化した学生たちに全てを丸投げするのではなく、ある程度のテーマは学芸員や公民館主事と協議の上、あらかじめ決めておく必要がある。最後に、「地域成果発表会」等で学んだことを地域住民に伝え、遠山郷の未来を共に考える。

・ 院生やリピーター等が TA 的にグループに入ってもらい、これまでの知見を活かせるようにする

共通事項

【取組み・方法の軸】

・ 大きなテーマは、with/after コロナ時代の遠山郷エコ・ジオツーリズムの在り方を考えること

・ 学生と地域住民が一緒に活動し、ともに考える場とする

・ 考えるための共通の下地としてエコ・ジオ、ＥＳＤ、ＳＤＧｓ、ツーリズムなどに関連する講義を持つ

・ 資源を発見、見える化し伝えるためのインタープリテーションを学ぶ

・ 遠山郷における持続可能な地域のあり方やそこでの資源の活用について考え、実際にインタープリテーション技術を駆使するなどアウトプットする

【取組みによって目指すフィールドスタディ「実践科目」のイメージ】

・ 学生・生徒にとっては、遠山郷というフィールドを通して「持続可能な地域のあり方」の認識が深まり、「インタープリテーション」の視点・技術が獲得できる

・ 地域住民にとっては、学術的な視点も含めて遠山郷の未来を考え、自分たちでその姿を創るための力を養うことにつながる

・ 継続的に実施していくことで、学生・地域の双方に経験が蓄積され、協働による積み上げ型の展開になっていく可能性がある

２．開催概要

□　期間

✧　事前学習：７月～９月

✧　フィールドスタディ：9 月 16 日（土）～18 日（月・祝）

✧　事後展開：10 月～

□　会場　　事前学習：ハイブリッド(対面とオンラインの併用)、現地調査：対面(2 泊 3 日)を予定

３．学びの全体像（案）

【アドバンストコースの設置】

- より専門的な知識の取得、多面性・多様的な思考力の育成、指導力の育成などを目的に、参加者（定員 5 名、遠山郷 EG-FS 修了生）を募集する
- 各自の卒論／修論のテーマを深めるために、フィールドスタディでは独自の調査を行うことができる。必要に応じて、グループワークのサポートをお願いすることがある。
- 参加費は、一般参加より安く設定する

４．2023 遠山郷 EG-FS の目的と学習内容（案）

□事前学習（７～９月）

日にち	内容（案）	共通／選択	場所
7/2	遠山郷とエコ・ジオパーク インタープリテーション講座（導入）	共通	ムトスぷらざ
7/21	遠山郷とエコ・ジオパーク グループ決め	共通	飯田市美術博物館
9/7	自然	選択	飯田市美術博物館
9/6	民俗学	選択	飯田市美術博物館
9/5	動物倫理	選択	ムトスぷらざ
7/27, 8/24, 9/8	☆とクレーター（講座併催）	選択	ムトスぷらざ

※共通科目は必修とし、選択科目からは 1 つ以上受講する

※アドバンストコースの参加者は、選択科目から＊＊と＊＊は必ず受講する必要がある

※遠山郷 EG-FS の参加者に限定せずに、公開講座として市内居住者から参加者を募集

□９月（現地調査）フィールドスタディ

(1) スケジュール案

１日目（9/16）	・　現地巡見（遠山郷の全体像を体感する） ・　フィールドワーク入門（調査計画）
２日目（9/17）	・　フィールドワーク ・　インタープリテーション講座（展開） ・　グループワーク（調査まとめ）
３日目（9/18）	・　グループワーク（成果発表会の準備） ・　地域成果発表会

※１日目 13 時 30 分現地集合、３日目 15 時現地解散

(2) 基礎講座

・フィールドワーク入門（調査計画）

(3) インタープリテーション講座（展開）

・講師　増田直広先生（鶴見大学短期大学部）

(4) フィールドワーク

・２日目（9/17）10～16 時

・１グループ５人程度

※テーマ：①自然、②民俗学、③動物倫理、④☆とクレーター

(5) 地域成果発表会＆交流企画

・３日目(9/18)13 時～15 時

・趣旨（参考・昨年度）

★各グループで設定した調査目標に対しての成果（発見・共感・了解・腑に落ちたこと等）を報告するとともに、それらを踏まえて、持続可能な社会の実現に向けた考え方や資源の活用方法について発表する。

※調査に協力いただいた方をはじめ、地域の方々を招待して実施する

・交流企画の趣旨

〇大学生／高校生→発表を行って／聞いて、あらためて気づいたこと、感じたことなどを共有

〇地域の方→発表を聞いて、はじめて知ったことや、気づいたことなどを教える

□飯田学🍎大学

・　9 月の調査をさらに深めて、みんなでつくる飯田の学びの輪「飯田学🍎大学」(2024 年１月予定)にて成果報告

➢　参考：2022 年度「フィールドスタディの学習から実践へ」（松本大学田開ゼミ）から成果報告（私が見つけた遠山郷の魅力）と地域資源発掘ワークショップを行った

・　参加学生・生徒、地域の方が継続して学習会を行う（Zoom 等を利用したオンラインゼミ、及び飯田駅前「ムトスぷらざ」での定例学習会）

以上

遠山郷エコ・ジオパークフィールドスタディ日程表

	時間帯 開始	時間帯 終了	時間帯 分	テーマ	講　師	会場
【事前】 共通科目1 7/2 （日）	13:30	17:00	210	1　☆とクレーター「坂本正夫物語」 遠山郷とエコ・ジオパーク インタープリテーション講座（導入）	飯田市美術博物館客員研究員 坂本 正夫　先生 飯田市美術博物館学芸員 四方　圭一郎　先生 鶴見大学短期大学部 増田　直広　先生	ムトスぷらざ 2階ホール
【事前】 共通科目2 7/21 （金）	17:00	19:00	120	2　遠山郷とエコ・ジオパーク（文化・くらし） 参加者グループづくり	飯田市美術博物館学芸員 近藤　大知　先生 上村公民館主事 原澤　泰知　さん	飯田市 美術博物館
【事前】 選択科目 7月～	17:00	18:30	90	3 【下記から1つ以上を選択し受講】 7/27、8/24、9/8　「☆とクレーター講座」 9/5 「人間と動物のあいだ」 9/6 「遠山郷の民族調査をみてみよう」 9/7 「伊那谷の自然・遠山の自然」	坂本先生、大石先生 大倉先生、水野さん 近藤先生 四方先生	ムトスぷらざ ムトスぷらざ 美術博物館 美術博物館
1日目 9/16 （土）	12:20	13:30	70	飯田市役所集合～飯田駅前経由～遠山郷へ移動		飯田市役所
	13:30	13:45	15	受付		上村公民館
	13:45	14:15	30	○ 開会式、趣旨説明、オリエンテーション		上村公民館
	14:15	17:30	195	4　巡見！「遠山郷の全体像を体感してみよう」 マイクロバスに乗車して、上村・南信濃地区内を巡ります	飯田市美術博物館客員研究員 坂本 正夫　先生 飯田市美術博物館学芸員 四方　圭一郎　先生	遠山郷各所
	17:30	19:30	120	夕食・休憩		
	19:30	20:30	60	5　フィールドワーク入門（調査計画①）	松本大学 田開　寛太郎 先生	いろりの宿島畑
				5　しらびその星空を天体観測 ※20:00～天体観測　20:30以降も継続	飯田市美術博物館客員研究員 坂本 正夫　先生 国立天文台 大石 雅寿　先生	天の川
	20:30	22:00	90	6　必要に応じてグループ単位での作業		
2日目 9/17 （日）	8:40	9:00	20	移動　※☆とクレーターグループは天の川から直接フィールドワークへ		
	9:00	9:45	45	7　フィールドワーク入門（調査計画②）	松本大学 田開　寛太郎 先生	南信濃公民館
	9:45	16:00	375	8　フィールドワーク このフィールドワークではグループ単位に分かれ、実践者のみなさんと一緒に地域に出たり、お話をうかがったりします。	■1テーマ【自然】 担当：四方圭一郎学芸員	下栗周辺
					■2テーマ【民俗学】 担当：近藤大知学芸員	上村・南信濃地区
					■3テーマ【人間と動物のあいだ】 担当：大倉茂先生	南信濃地区
					■4テーマ【☆とクレーター】 担当：坂本正夫先生、大石雅寿先生	しらびそ高原周辺
	16:15	18:00	105	9　ワークショップ（グループ単位での振り返り・まとめ）		南信濃公民館
	18:00	20:00	120	宿泊先へ移動　～　夕食・休憩		
	20:00	21:00	60	10　インタープリテーション講座（展開）	鶴見大学短期大学部 増田 直広 先生	いろりの宿島畑
	21:00	22:00	60	11　必要に応じてグループ単位でのまとめ作業能 ※終わったグループから就寝		
3日目 9/18 （月・祝）	8:30	9:00	30	移動		
	9:00	12:00	180	12　ワークショップ　（まとめ・発表準備）		南信濃公民館
	12:00	13:00	60	昼食		南信濃公民館
	13:00	14:45	105	13　地域成果発表会・交流会		南信濃公民館
	14:45	15:00	15	○　総括・閉会		南信濃公民館
	15:00	16:15	75	飯田駅前経由～飯田市役所へ移動～解散		飯田市役所

遠山郷エコ・ジオパークフィールドスタディ参加者名簿

■フィールドスタディ参加者

No	氏名	大学・学部・学科　等	学年	選択コース	9/16宿泊	9/17宿泊	備考
1	山本　真弦	松本大学総合経営学部	3年	自然	島畑　渓谷		
2	孫　悦	東京農工大学大学院	修士２年	自然	島畑　川蝉		
3	佐々木　耕太	阿南高校	3年	自然	島畑　渓谷		
4	早瀬　太一	阿南高校	3年	自然	島畑　渓谷		
5	染野　静来	麻布大学獣医学部	1年	民俗学	島畑　清流		
6	比留間　歩美	麻布大学生命・環境科学部	1年	民俗学	島畑　清流		
7	今井　優人	松本大学総合経営学部	3年	民俗学	島畑　新緑		
8	工藤　太陽	松本大学総合経営学部	4年	民俗学	島畑　渓谷		
9	陳　佳虹	東京農工大学大学院	修士２年	民俗学	島畑　清流		
10	増田　桃子	麻布大学獣医学部	3年	動物倫理	島畑　川蝉		
11	清水　彩恵	麻布大学獣医学部	4年	動物倫理	島畑　紅葉		
12	城取　七音	松本大学総合経営学部	3年	動物倫理	島畑　池口岳		
13	北原　彬子	下伊那農業高校	2年	動物倫理	島畑　川蝉		
14	西尾　咲輝	下伊那農業高校	2年	動物倫理	島畑　紅葉		
15	山本　洸聖	都留文科大学教養学部	1年	☆とクレーター	天の川A	島畑　池口岳	
16	信樂　大	松本大学総合経営学部	4年	☆とクレーター	天の川A	島畑　新緑	
17	藤本　春希	阿南高校	3年	☆とクレーター	天の川A	島畑　池口岳	
18	松下　穂路	阿南高校	3年	☆とクレーター	天の川A	島畑　新緑	

■☆とクレーター講座一般参加者

No	氏名	大学・学部・学科　等	選択科目	9/16部屋割り	9/17部屋割り	備考
1	伊藤　賢治	遠山ガイドの会	☆とクレーター	-	-	日帰り参加
2	赤羽目　壮人	遠山ガイドの会	☆とクレーター	-	-	16夜のみ参加
3	村山　鑑恵	府中市市民活動支援センター	☆とクレーター	天の川B	-	
4	河合　泰明		☆とクレーター	天の川B	-	

■企画運営メンバー

No	氏名	大学・学部・学科　等	選択科目	9/16部屋割り	9/17部屋割り	備考
1	朝岡　幸彦	東京農工大学	-	-	-	18日参加
2	大石　雅寿	国立天文台	☆とクレーター	天の川C	島畑　光岳	
3	大倉　茂	東京農工大学	動物倫理	島畑　兎岳		
4	小玉　敏也	麻布大学	民俗学	島畑　聖岳		
5	田開　寛太郎	松本大学	自然	島畑　上河内岳		
6	増田　直広	鶴見大学短期大学部	-	-	-	オンライン参加
7	近藤　大知	飯田市美術博物館	民俗学	-	-	
8	坂本　正夫	飯田市美術博物館	☆とクレーター	天の川D	-	
9	四方　圭一郎	飯田市美術博物館	自然	-	-	
10	原澤　秦知	上村公民館	-	-	-	
11	野牧　和将	上村自治振興センター	自然	-	-	
12	加藤　博文	大学誘致連携推進室	民俗学	島畑　洋室２		
13	下平　一博	大学誘致連携推進室	☆とクレーター	天の川E	島畑　鶏冠岳	
14	小島　一人	大学誘致連携推進室	動物倫理	島畑　洋室１		

遠山郷エコ・ジオパークフィールドスタディ　アンケート結果

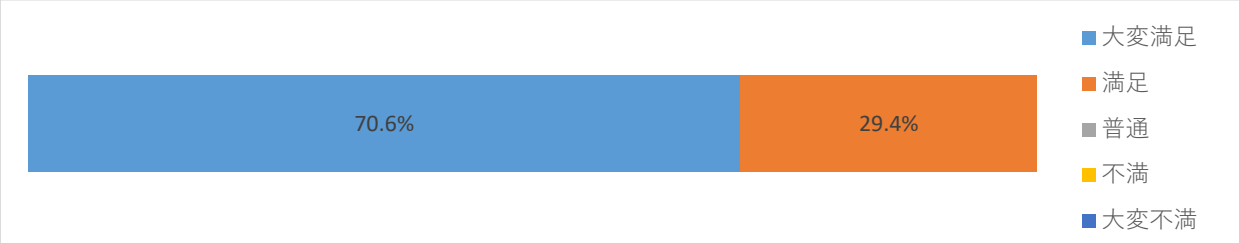
1　日　程　事前学習：共通科目 7/2（日）、7/27（金）
　　：選択科目【自然】9/7（木）【民俗学】9/6（水）【動物倫理】9/5（火）、
　　【☆とクレーター】7/27（木）、8/24（木）、9/8（金）
　　FS 本番　：9 月 16 日（土）～18 日（月・祝）
2　参加者　18 名　大学生 12 名：麻布大学 4 名、東京農工大学 2 名、松本大学 6 名
　　高校生 6 名：下伊那農業高校 2 名、阿南高校 4 名
3　回答数　17 件

-フィールドスタディの内容に関する項目-

1．事前学習①：共通科目「全体事前学習会」について

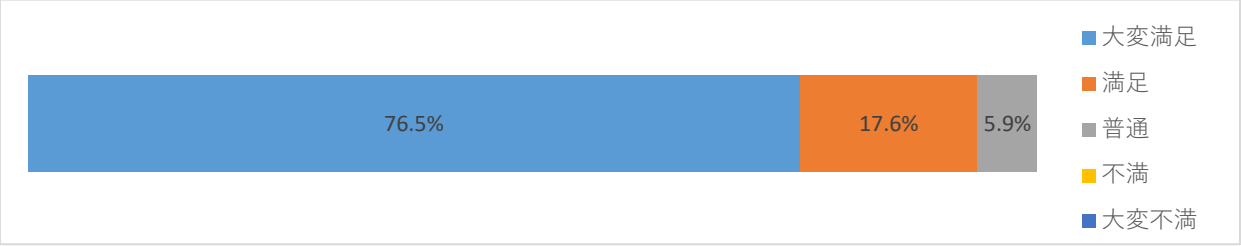
・事前学習を通して、期待度が高まった。
・遠山郷ではどのような自然と共生しているのかなどを知れたのがよかった。
・飯田について知らないことが多かったので、参考になった。
・最近訪れることが増えていた遠山の魅力を改めて確認できた。
・資料が用意されていて、理解しやすかった。
・実際の画像や実習を交えての説明でとてもわかりやすかったと感じました。
・オンラインとハイブリッドにするのはとても助かりました。
・授業やテストと被ってなかなか入れなかった。
・当日リアルタイムでの参加は出来ませんでしたが、録画で見返せるのはとても助かりました。
・事後視聴もできることがよかったです。
・最初の事前学習で坂本先生の話は、難しいと感じた。
・（高校生）この事前学習では、普段聞けない授業、内容、教養を学べたので良い体験だった。
・（高校生）わかりやすかった。
・（高校生）難しい内容のものもあったけど、遠山についてより知ることができたのでよかったです。
・（高校生）自分がグループワークで学ぶこと以外のことを学べて良かったです。

2．事前学習②：選択科目「コース別事前学習会」について



・フィールドスタディでの目標を見つけるきっかけになったのでよかった。
・話を聞きながら課題を見つけられた。
・今まで勉強したことの復習にもなった。
・宇宙の魅力や御池山クレーター、南アルプスの地質を実物の画像や望遠鏡での写真などを交えて説明していただきその存在を実感し、理解を深めることができました。
・遠山郷を知り尽くした方からお話を聞くことができたから。
・先生の説明はとても詳しい。
・内容が充実で、説明も詳しいです。
・近藤さんのお話が丁寧で分かりやすかった。
・授業やテストと被ってなかなか入れなかった。
・当日リアルタイムでの参加は出来ませんでしたが、録画をして頂いたことで後からでも視聴できるのはとても助かりました。
・内容もとてもおもしろく、ハイブリッドは助かります。
・リアルタイムでの参加はほとんどできませんでしたが、動画配信があったため気になるところは止めながら確認することができた。
・（高校生）説明がわかりやすい。
・（高校生）四方先生のお話は、とても面白く、興味深く、崇高である。この話を聞けたことは貴重だ。
・（高校生）自分たちの身の回りには沢山の動物がいて、沢山の動物と関わる機会があることが知れたし、動物は可愛いけど、ペットショップにいる犬とか猫の親が最悪な環境で過ごしていたり、家畜動物は最終的には食べられてしまう動物だから、残酷な面があることを改めて感じました。
・（高校生）いろんな人間と動物のあいだについて知ることができました。

３．巡見！「遠山郷の全体像を体感してみよう」



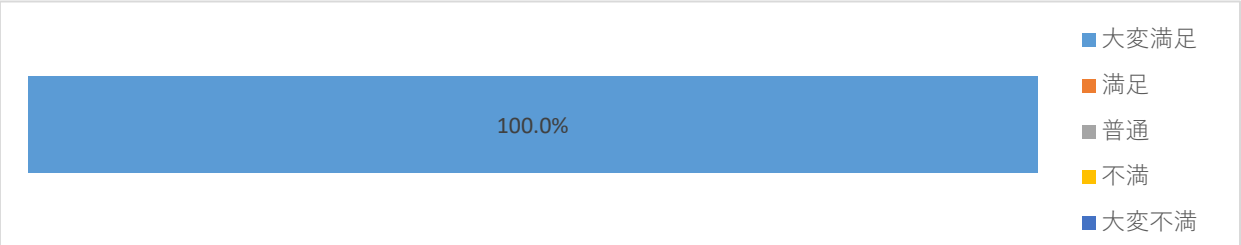
・自然に近い、自然の美を感じることができる。
・知識以外にも、素晴らしい景観など知ることができてよかった。
・実際に行ったことで遠山郷の自然を感じることができた。
・色々な観点から見ることができた。
・遠山について改めて知れた。
・実際に見ることで事前に学習したことを思い出しより学びが深まった。
・遠山郷内の様々場所をまわりながら実物や資料と共に学ぶことができました。
・それぞれの専門分野を担当する方々に一つの場所で違った視点からの解説を受け、とても面白かった。
・解説の方々の熱心な説明と遠山郷全体を見て回れたことはとても貴重な体験でした。
・時間に限りがあるが、地形系だけでなく、遠山郷の文化（霜月祭りのお宮を見させていただく等）などについても知れる内容が良いと感じた。
・私は楽しかったけど、車酔いする人には配慮が必要だなと思いました。
・解説に間に合わなかったのがちょっと残念でした。全体としては満足です。

・（高校生）私は飯田市出身だが、遠山郷に訪れたことはなく、自分にとって未知の世界であった。その遠山郷を見れたこと、体で感じたことはとても糧となる経験でした。
・（高校生）たのしかった。
・（高校生）実際に遠山郷に行って、どんな場所があるのかとかどんな方々が暮らしているのかを体感することができてとてもいい機会でした。
・（高校生）実際に体感することで体全体で感じることができました。

4-1．フィールドワーク入門（自然コース・民俗学コース・動物倫理コース）

・2 日目のフィールドワークに向けてスムーズに進めるための準備や基本的なインタビューの条件などを詳しく学ぶ機会でとても良かった。
・先生が丁寧に説明してくれました。
・実践に使える知識を蓄えられた。
・フィールドワークは、まだ学習が足りない部分が多かったので、参考になった。
・みんなで調査計画を練ることで聞きたいことなどを明確にできたことがよかった。
・グループワークでより班の人と距離が縮まった。
・共通のものからグループ名を作るのが楽しかったです。
・わかりやすくて、リラックスできた感じがしました。
・グループの仲を深めるために簡単なレクがあっても良いと思う。
・いつもと変わらない自己紹介で安心した。
・当日、コースの関係で参加することができませんでしたが、資料などからフィールドワークのあり方や方法を学ぶことができ、今後のフィールドワークへ活かしてゆきたいと感じました。
・（高校生）大学生が優しかった。
・（高校生）フィールドワークを本格的にやったことはなく、入門レベルから教えて貰えるのは光栄だ。
・（高校生）チームの人で自己紹介したり、チームの名前を決めたりして、チームの仲を深めることができて楽しかったです。
・（高校生）楽しくフィールドワークができました。

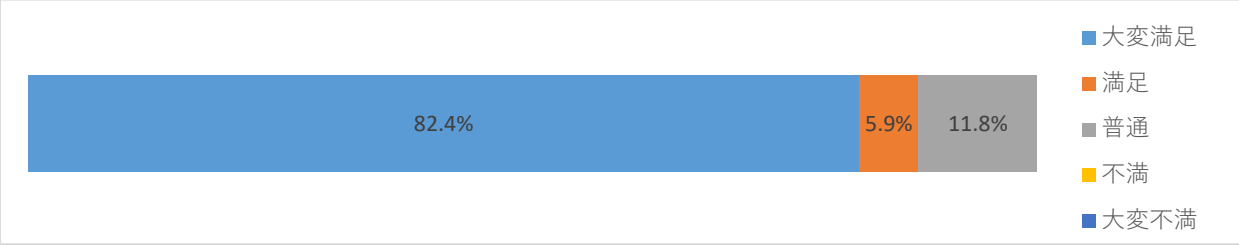
4-2．しらびそでの星空天体観測（☆とクレーターコース）



・普段見ることのできないような美しい星空を観察し、しらびそ高原の素晴らしさを実感することができました。

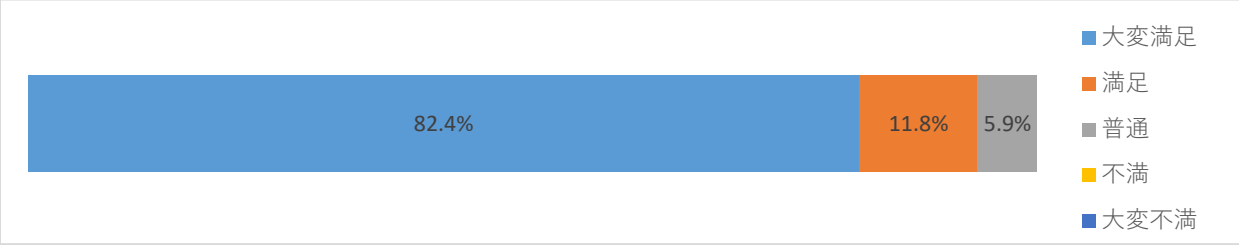
・私も普段星が見られやすいところに住んでいますが、それ以上の星空に感動しました。

5．フィールドワーク



【自然コース】
・大変なことも多かったが、フィールドワークを通して下栗について知ることができたし、現地に住んでいる人の話を聞くことで、良い経験をすることができた。
・よかったと思います。
・（高校生）教授の説明がよい。
・（高校生）自分にとっては人生初のフィールドワークでした。普段の生活では聞けない話、行けない場所に行けたことは楽しかった。またこのような機会がありましたら参加したいです。
【民俗学コース】
・貴重な時間を過ごすことができた。
・タメになりました。
・近藤さんの解説が丁寧です。キーパーソンにゆっくり話を伺うことができて、よかったです。
・住民の方からお話を伺う貴重な機会であったが、時間の制約があり、なかなか深掘りができなかった。
・貴重な話を聞けた。
【動物倫理コース】
・今まで経験したことの無いことを体験でき、良い思い出にもなった。
・個人では中々出来ないシカの解体や調理、猟師という仕事に求められる責任など普段の生活とは全く違う非日常を味わえたことがとても貴重でした。
・益山さんにはとてもお世話になりました。
・（高校生）鹿の解体を行って、改めて自分たちは動物から命をいただいて生きていることを実感したし、とても貴重な体型をできたのでよかったです。カレーとヒレカツ美味しかったです！！
・（高校生）貴重な体験ができて、とても楽しかったです。
【☆とクレーターコース】
・実際にクレーターの縁をめぐり、地質を形成する岩石の実物を見たことでより理解が深まったと感じました。
・とてもマニアックな分野でしたが、グループのメンバーはとても真剣で楽しそうに話を聞いていたので良かったと思います。反省点としては学生側があまり質問が出来なかった点です。

6．インタープリテーション講座（展開）



・インタープリテーションの手法などを実習などを通してわかりやすく説明していただきよく理解することができました。
・私自身インタープリテーションに興味があるため、とても勉強になる講義だった
・大学でプレゼンなどする機会が多いので、人にどのように伝えればいいのか、知ることができた。
・特にテーマを考えるワークが面白かった。
・グループワークが盛り上がって、班の人と距離が縮まった。
・すぐに実行できそうな知識だった。
・タメになりました。
・成果発表会に向けた、ただ学んだことを発信するのではなく自己の体験から感じた自分の感じ方などを交えて発信する手法などインタープリテーションに必須な事項について改めて学ぶことができた。
・翌日の発表に役に立ちました。
・発表の際にどう纏めていけばよいのかが改めて分かった。
・どうすべきかを簡単に説明いただけました。
・内容もとても面白く聞くだけではなく参加型にしてくれたから面白かった。
・(高校生)インタープリテーションという言葉は私は初めて知りました。成果を発表するだけではなく、対話を重ねながら人にものを伝える大切さは将来に役立てれそうで良いお話が聞けた。
・(高校生) 発表のやり方がわかった。
・(高校生) 相手への伝え方について改めて考えることができました。
・(高校生) 難しかったです。

7. グループワーク

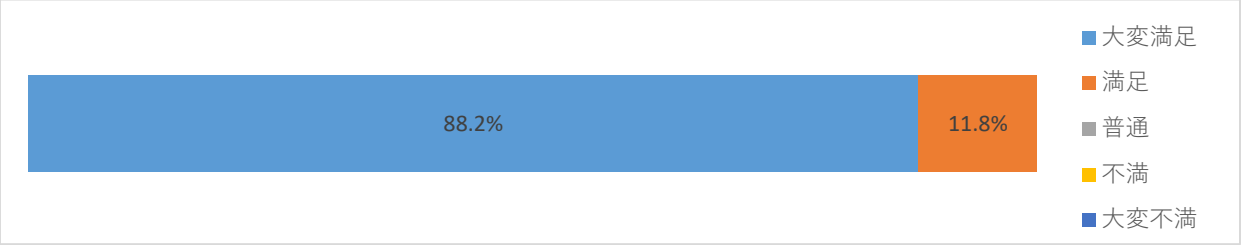
・2 日目のフィールドワークを通じて仲良くなれて他大学の学生や高校生達と協力して何かを成し遂げるという活動がとても有意義な時間でした。
・みんなと協力して作ることができました。
・コース全員でひとつ物もを作り上げるのはやはり楽しい。
・発表まで大変なことが多かったが、チーム全員で意見を出し合いながら進めることができてよかった。
・限られた時間の中で何かを作るときの班の中での協力プレーが学べた。
・グループワークに関して、私はポスター作成にあまり協力出来ませんでしたがメンバーが率先して案を出し、原稿を用意していたため私は私の作業に集中することができました。
・グループメンバーが意見交換をし、協力し合ったこと。
・自分たちでどうわかりやすく発表するかを相談しながら協力する過程が凄く楽しかった。
・大学 4 年生の方が話をまとめてくれて、すごいなと思いました。
・作業時間を十分に確保いただいたため、比較的余裕を持って作業ができた。
・時間がギリギリだったが満足のいくものにできた。
・ある程度発表準備を計画的に進められたものの、模造紙作りに手こずり少し雑な部分ができてしまったところが反省点です。

・（高校生）めちゃくちゃいい雰囲気だった。
・（高校生）初対面の人といきなりグループワークは緊張感があり、一日で調べたことを完成しなければならないのは忙しく初めての経験で不安が多かった。しかし、初対面でも、力を合わせれば困難も乗り越えられる。良い意味でなんとかなるという楽観的な考えは必要である。
・（高校生）チームの皆さんと協力してとてもいい出来の模造紙が完成したのでよかったです。
・（高校生）年齢や学校が違う人とグループワークをすることは普段は中々出来ないことなので、今回のグループワーク、ワークショップはとても良い経験になりました。

８．地域成果発表会

・順調に計画通りに発表することができました。
・しっかりと学んだことを発表できた。
・自分で満足できる発表はできなかったが、自分達の成果をしっかり伝えることができてよかった。
・少し準備が足りなかなと感じる部分もありましたが、メンバーの自身に満ちた発表により、大きなミスもなく終われることができました。
・模造紙に書かれていることだけでなく、観客の方に質問を投げかけたり、説明に抑揚をつけるなどの工夫ができたと感じます。
・自分のグループの発表にも満足したが他のグループが何をやったのかを知れてよかった。
・グループで纏めた内容を発信することは自分自身への再インプットにもなり、沢山の方々からの質問に応えるのも、フィールドワークでの体験をさらに深める非常に有意義な時間だった。
・お世話になった方々に聞いてもらえること、感想をいただけることが嬉しかった。
・思っていたより多くの人が集まってくださり嬉しかったです。
・発表後の交流がよかったです。
・地域の方からの講評や地域に対する思いを聞いて、胸が熱くなった。
・もう少し時間が欲しいところでした。
・（高校生）みんなの距離感が近くてよかった。
・（高校生）自分たちの探求成果を地域の人達、先生方に清聴して貰えるのは光栄でした。
・（高校生）沢山の人の前で話すのは緊張したけど、益山さんも褒めてくれたし、とてもいい経験ができたのでよかったです！
・（高校生）緊張しました。

９．フィールドスタディ全体を通して



・今まで経験してこなかったこと、考えたこともなかったことがこのFSを通じて学べたことが自分の1つの糧になったのでとても満足です。
・今回のFSを通じて、地域の魅力やアイデンティティを直に観察し実感することができ、これからの大学での学習に活かしてゆきたいと感じました。
・3 日間を通して、沢山の方と交流できたこと遠山郷という素晴らしいものが沢山ある地域を知れたこと、それを観光という面からではなくより深い部分まで経験できたことが何よりも貴重な時間でした。
・充実した3日間で、ご飯もとても美味しくて、改めて遠山郷の魅力に気付いた。
・学びができたと同時に、遠山郷に愛着を抱くようになりました。
・地域に関わるということを体感できた。
・全体を通して大変なことが多かったが、他の大学や高校生と交流することで、自分の成長に繋げることができた。
・前回参加した時はコロナ禍だったため、メンバーとの情報交換や準備がうまく行かず発表も不完全燃焼でしたが、今回はメンバーとの交流や情報交換、準備がとても上手くいったため、とても充実した3日間になりました。
・また行きたいです。参加して良かったです。
・ずーーーっと楽しかったです！
・満足感を感じました。
・またぜひ参加したいと思えるようなFSでした。
・（高校生）百聞は一見にしかず。聞くだけでなく現地に赴いて調べる、見ることが大切。また、探求テーマだけでなく、他校、他大学の方と交流が深められたことはいい経験でした。
・（高校生）楽しかった。
・（高校生）とても貴重な体験をすることができたし、自分自身成長できた部分もあるので、参加してよかったです！！ほんとに楽しかったです、ありがとうございました。
・（高校生）貴重な経験ができ、楽しい思い出を作れました。ありがとうございました！

-その他全体に関わる項目-

■この取組をより充実したものにするためには、どうしたらよいと思いますか？

【交流の機会の充実】

・もっと生徒同士の繋がりを意識するために、一日目もコースごとに何かをしてから FS を開始しても良いと思います。
・先生や役所の方含め全員の自己紹介や簡単な交流会があったら嬉しいです。
・グループ以外との交流をもっととりたかった。

【体験の機会の充実】

・今回の FS では動物倫理のコースに入り、身をもって体験することで自然と頭に知識やお話が染み込んでくれたので、聞くだけでなく自分たちで何かを行っていくコースを増やしても良いのではないかと思っている。
・基本的には現在の FS をそのまま続けていただきたいと考えていますが、実際に遠山郷を巡見する際に全てとはいかなくとも少しの区間や幾分かの距離でバス移動ではなく徒歩による移動も入れた方がより遠山郷の素晴らしさや自然の豊かさを感じることができるのではと感じました。

【準備・段取り】

・発表に使う模造紙を、2 日目の準備の段階で用意していただくと、最終日の準備でもっとスムーズに

進められると思う。
・（高校生）先日はお世話になりました、私の意見としましては発表ための準備の時間がもっとほしいと思いました。

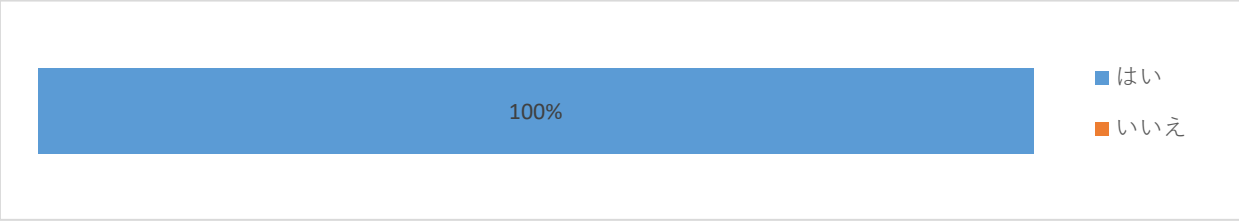
【募集の工夫】

・2 日目のフィールドワークの内容をもっと募集時点で発信していくことが効果的なのではないかと感じた。私自身も参加が決まった時点では「遠山郷という地域で他大学や地元の高校生たちと何かをする」という程度の認識しかなく、参加に対して不明点を多く感じた。実際のフィールドワークの様子などが事前に知ることが出来れば、参加に対しても意欲的になるし、自主的に参加したい！と思うような学生も増えるのではないかと思う。
・（高校生）高校生がもっといろんな学校から参加してほしいです。
・（高校生）もっと参加校を増やしてみる。

【地域のみなさんの関わり】

・エコ・ジオパークフィールドスタディであるため、ある程度、学術的な学びを得る必要があるかもしれないが、何度も遠山郷に来ている人間としては、もっと多くの遠山郷に住む人がフィールドスタディに関わり、参加した生徒、学生が遠山郷の人々の地域に対する思いに触れられるようなプログラムにしてほしいと思う。遠山郷の人たちは面白い人が多く、生徒、高校生にとっては自身の人生、生き方すら見つめ直すような機会になる可能性もあると考える。また、実際遠山郷の人に FS について聞いてみても「フィールドスタディって何？いつやるの？」と聞き返されることが多い。フィールドが遠山郷だけで終わるのではなく、もっと住民の人たちと距離を縮め、内々で終わらないようなフィールドスタディにしていってほしい。

■このような取組があれば、また参加したいと思いますか？



・普段体験できないことができるから。
・来年も行きますよー！！！！
・今回のフィールドスタディでは体験ももちろん、沢山の方とお話する機会が多く、個人的には多くの新しい繋がりが持てたことが非常に大きな成果だと感じています。この繋がりを継続させるためにも来年度も参加したいと考えています。
・（高校生）地域社会には改善点がかなり有る。それらの解決策を人々と共に見つけ出す経験は必要だ。
・（高校生）できれば来年も参加したいです！

■また遠山郷を訪ねてみたいと思いましたか？

・山に囲まれるという経験が今までなかったので、すごく新鮮でした。秋になるともっと綺麗になると

思うから、その時は太陽堂にもっとゆっくり滞在したいです。楽しい4日間を本当にありがとうございました。来年も絶対に開催してください(^^)v

・ご飯も美味しく、何より関わって下さった全ての方々が本当にあたたかく迎え入れてくださったお陰でこんなにも楽しい体験の時間が過ごせました。また必ず訪れたいです。

・(高校生)しらびそ高原から見える星や遠山郷のクレーター、地層の探求をしてみたい。その他にも地元の猟師さんの話をもっと詳しく聞きたい。ジビエ料理も堪能したいと思う。

遠山郷エコ・ジオパークフィールドスタディ振り返りレポート

コース	No.	学校名	氏名	ページ
自然	1	東京農工大学大学院	孫　悦	18
	2	松本大学総合経営学部	山本　真弦	19
	3	阿南高校	佐々木　耕太	20
	4	阿南高校	早瀬　太一	22
民俗学	5	麻布大学獣医学部	染野　静来	24
	6	麻布大学生命・環境科学部	比留間　歩美	25
	7	東京農工大学大学院	陳　佳虹	26
	8	松本大学総合経営学部	今井　優人	28
	9	松本大学総合経営学部	工藤　太陽	29
動物倫理	10	麻布大学獣医学部	清水　彩恵	30
	11	麻布大学獣医学部	増田　桃子	31
	12	松本大学総合経営学部	城取　七音	33
	13	下伊那農業高校	北原　彬子	35
	14	下伊那農業高校	西尾　咲輝	37
☆とクレーター	15	都留文科大学教養学部	山本　洸聖	38
	16	松本大学総合経営学部	信樂　大	39
	17	阿南高校	藤本　春希	40
	18	阿南高校	松下　穂路	41

遠山郷の自然と文化：エコ・ジオパークフィールドスタディの冒険

自然コース　東京農工大学大学院修士２年　孫　悦

はじめに

遠山郷エコ・ジオパークフィールドスタディに参加し、貴重な経験だと思う。遠山郷エコ・ジオパークは、その息をのむような自然美と豊かな文化遺産で知られ、持続可能性の探求における魅力と課題の両方を抱えている。本文では、遠山郷エコ・ジオパークの魅力、持続可能性に向けた課題、そしてその探求に焦点を当て、その重要性について探求する。

フィールドスタディの一環で、事前学習会で遠山郷の地質学と地形について学んだ。特に印象的だったのは、地層の厚みや岩石の種類が異なることが地形にどれだけ影響を与えるかということである。遠山郷の急峻な山々と美しい渓谷は、何百万年もの地質活動の結果であり、自然の力の素晴らしさを感じた。実際、山に入ると、遠山郷エコ・ジオパークは、圧倒的な自然美を誇る。このエリアは生態系の宝庫でもあり、植物や動物の多様性が豊かである。フィールドスタディは「自然」「民俗学」「動物倫理」「とクレーター」を分けた。この四つのテーマを通じて、将来の地域発展の可能性を考える。

自然、民俗、動物倫理は問題点を発見し、持続可能に発展するため、解決策を提言する。自然のフィールドスタディから人間の知恵は無限であり、人間の生命は神のように人間を守る自然の恵みと切り離すことはできないことを学んだ。それゆえ、私たちは自然を敬い、自然がもたらしてくれた恩恵に感謝しなければならないことを感じた。地元の人々からの話や実体験を通じて遠山郷で自然と向き合う人の考え方や価値観に触れる。彼らの生活や文化について見識を深めることができた。自然環境には地元コミュニティとの協力が不可欠であることを学んだ。持続可能性の探求において、遠山郷エコ・ジオパークは地域社会と連携する。地域の住民と協力し、地元の文化や伝統を尊重しながら、地域資源を活用した活動を行っている。また、教育プログラムを通じて、訪問者に自然の尊さと環境保護の必要性を啓発している。さらに、エコ・ジオパークは地域の持続可能な開発にも貢献している。地元の産業を促進し、地域経済の発展に寄与している。地元の資源を適切に活用し、自然と文化に配慮した取り組みを推進している。

☆とクレーターはしらびそ高原から星空を観察し、普段見ている星空について普段と違った見え方や星と南アルプス特有の地形や地質についてより専門的な知識を得た。地質学、生態学、地域社会との交流、持続可能な開発、環境保護といった面で、私たちに貴重な経験とインスピレーションを与えてくれた。この経験を通じて、私たちには地域の美しさを守り、持続可能な未来に向けて努力する責任があり、遠山郷エコ・ジオパークはその重要な一部であると信じている。

課題：

・遠山郷エコ・ジオパークは持続可能性に向けた課題にも直面している。

・観光による生態系への影響が懸念される。増加する観光客数は、自然環境や野生動物に対する圧力を高め、生態系のバランスを崩す可能性がある。

・子どもたちに自然体験活動を企画することは必要だと思う。子どもたちに環境教育をしながら、地域の発展にも一役買うことが期待されている。

・過度な開発や資源の乱用により、地域の環境が悪影響を受ける恐れもある。

・地域社会との調和や文化遺産の保護も重要な課題である。持続可能な発展を実現するために、これらの課題に真剣に取り組む必要があると考えている。

遠山郷ＦＳを通して

自然コース　松本大学総合経営学部３年　山本　真弦

今回の遠山郷ＦＳを通して、人の想いを聞くこと、そしてそれを伝えることの大切さを学ぶことができた。

私は自然グループの一員として、遠山郷の下栗地区に訪れることになった。遠山郷は大学のゼミの活動で、何度か訪れたことがあったが、今回下栗に行くのは初めてであった。最初に驚かされたのは、その景観だ。本当に人が生活することができるのかと疑うほど急斜面な場所で、標高も高く今まで見たことのない家の景観を目にした。また、当日のフィールドワークで同行してくださった野牧さんのお話を聞き、下栗に暮らしている人々が、どのような環境で生活しているのか知ることができた。中でも印象に残ったのは、畑のことについてだ。実際に畑の中に入らせていただいたのだが、とても急斜面で立って歩くのが精一杯だった。その中で、畑一面に作物を植え収穫も行っているということで、暮らしている方の苦労以外にもたくましさを感じることができた。また急斜面に畑を作る必要性から、ほかの平地に作る畑と違い畝の作り方が違うなど、長年下栗に暮らしているからこその知恵を知ることができた。それ以外にも、下栗の作物の特徴として多品種少量生産であることや、日当たりがいいことからどんな作物でも育てることができると教えていただいた。中でもフィールドワークの昼食で頂いた下栗イモを使ったコロッケは、今まで食べたイモを使ったコロッケの中で一番おいしかった。

次にフィールドワークを通して得た経験として、長年下栗の土地で暮らしていらっしゃる、仲井栄さんの話が自分にとっても貴重な体験になった。私の下栗の第一印象として厳しい環境下で今までよく生活ができたいたなと思った。しかし、お話を聞いてこの現代の生活で大切しなければならないことを、考えなければならないと感じた。下栗は標高も高く、今と違い道路も整備されていなかった当時は、水も簡単には手に入らなかった。それでも下栗の人たちは、自分たちの目の前にあるものを最大限活用し、使えないと思うものでも再利用し、一切無駄のない生活をしていたとお話の中で感じることができた。私たちが暮らす現代社会は、何でも手に入り多くのものが溢れた環境で生活している。それゆえにものを簡単に捨て、新しいものができればそれを手に入れようとしてしまう。昔の下栗の生活を知ることで、現代社会でやらなければならないことを知ることができ、自分の生活の仕方も改めなければならないと痛感した。

今回のフィールドワークの成果として、地域の方たちの前で自分たちが学んだことを発表することになった。しかし、自然グループは自然以外にも教えていただいたことも多かったので、どう発表すればいいのか悩むことが多かった。それでもグループ全員の力で発表を成功させることができ、グループ全員がいなかったら発表を成功させることはできなかったと感じた。また、自分と立場の違う学生と交流することで、自分で考えられない意見を知ることができ、自身の考えを深めるきっかけにすることができた。

成果発表会の中で大切にしたことは、自分が感じたことをどのようにして相手に伝えるかである。インタープリテーション講座などを通じて、人に思いを伝えることの重要さをより一層強く感じた。下栗の話を聞く中で、高齢化が深刻であり移住者がほとんどいないなどの地域の課題を聞いた。将来、下栗の集落が消滅してしまう可能性もある。しかし、この遠山郷ＦＳ全体を通して、自分たちが知ったこと、見たこと、感じたことを多くの人に伝えなければならないと思った。下栗の景観、暮らし方を後世に伝えていくためにも、遠山郷に関係がなかった自分たちが、その役割を担っていく必要があると感じた。今回の遠山郷ＦＳを通して、人の想い、自分の想いを伝えることの大切さを学ぶことができた。

自然と地域との関わり方

自然コース　阿南高校３年　佐々木　耕太

１．はじめに

今回の遠山郷フィールドスタディに参加してたくさん大学生やたくさんの地域の人々と関わってきました。私がフィールドスタディに参加した理由としては、いろいろな人と関わってみたいと言う思いや今自分が住んでいる阿南町との違いや同じところを探してみたいと言う好奇心から、今回のフィールドスタディに参加しました。そこで私は遠山郷の自然について調べ、僕たちは下栗の里でどのようにして急な斜面を利用して生活しているのか、地域とのつながり、そこでしかできないことを学ぶことができました。

下栗の里

南アルプスの峰々が間近に迫る山岳地帯。 標高 800m から 1000m の地に浮かぶように広がるのが飯田市上村遠山郷にある「下栗の里」です。 最大傾斜 38 度の急斜面に畑や民家が寄り添うようにあり、その間をぬうようにつづら折りの坂道が走る独特の風景が魅力的です。

２．疑問

主にこの 3 つの疑問を持ちました

・昔と今の違い

・地形をどのように活用しているのか。

・どのようにして自然と関わっているのか。

地域の人のお話

傾斜がすごいためまずは田んぼが作れないから畑を主に作っている。こんにゃくいも、麦や穀類、そばの実など工夫して無駄のないように土地を活用することがわかりました。昔はお米が取れないため大豆と交換して手に入れていたと言うことを聞きました。化学肥料などを使うと雨によって流されてしまうため下からおねを作ったりするなど工夫が施されていることもわかりました。下栗の里の特産品の下栗いもは 1 年で 2 回取れるなどすごい優秀な作物で食べてみるとすごく甘くて味が引き締まっていてとてもおいしいです。昔は水道の設備が整っていないため天秤を使ってへ急な斜面を歩いて運んでいたことや、竹を利用して水道管代わりにしていたことがわかりました。昔を週 1 回お風呂に入れるかどうかなので、周りの住民の人たちが入りに来ることがあるらしいです。霜月祭では鳶を上から見た踊りをすることもわかりました。鳶を上から見たことがなかったので、遠山ならではの良いとこではないかと思いました。400 年前には雨が降るまで雨乞いをしてたのですが、今では年に 1 回やるかやらないか位なので、昔からの伝統が消えてしまうのではないかと言う新たな疑問も生まれました。

３．まとめ

遠山では、地形を利用して作物を作っていることがわかりました。遠山の人々は自然をうまく利用して、自然と密接に関わっていることがわかりました。昔までは物々交換といった地域との結を大切にしていることが分かったけど、現在ではその結が薄れていることや伝統やお祭りなどがなくなっていくことが 1 番の課題であると感じました。

４．感想

今回のフィールドスタディでいろいろな人と関わってきて、その地域に対してどのような課題があるか、自分が疑問を持っているかが大事だと思いました。とても濃い 3 日間ありがとうございました。

食の下栗

自然コース　阿南高校３年　早瀬　太一

私が遠山郷エコ・ジオパークフィールドスタディに参加した目的は３つあります。１つは遠山郷について知る　こと、2 つ目は持続可能な社会について学ぶこと。3 つ目は他校・他大学の方たちと交流を深めたかった。この 3 つの理由がこのプロジェクトに参加した理由です。本稿の内容は下栗の食です。

下栗の里ではここでしか収穫できない特産品や、下栗の郷土料理を調査しました。まず下栗の里では農業が盛んで、自給自足と多品目少量生産を行っています。多品目少量生産とは文字通り多くの種類のものを育て、一つ一つの量は少なく生産することです。下栗では主に麦・小麦・コキビ・エゴマ・アワ・タカキビなどの穀物。コンニャクイモ・根菜類・山菜・茶・蕎麦・いも・大豆・菌類など幅広い植物を育てています。これらの作物は昔から今まで長い間育てられている歴史ある植物です。

□芋類

●下栗イモ　最大傾斜 38 度の下栗の急傾斜面畑で作られている普通のジャガイモより小振りなジャガイモです。かつて年２回収穫できたことから「二度イモ」と呼ばれています。甘くてデンプン値が高く、煮込んでも煮崩れしない特徴があります。特有の旨味は下栗の土でしかできないとされます。この下栗イモは、いろんな料理になります。下栗の蕎麦を使った蕎麦団子に秋刀魚を入れた秋刀魚入り蕎麦団子。小さめの下栗イモをゆで３～４つを串に刺し、地元産のエゴマ味噌やくるみ味噌・ねぎ味噌などをつけて炉端焼きした芋田楽。下栗イモの芋焼酎・下栗イモを使った煎餅があります。●コンニャクイモ　下栗の里では手作りでこんにゃくが栽培されています。下栗の畑で採れたコンニャク芋から作る手作りコンニャクは、味、香り、食感すべてが市販のものとは違います。コンニャクができるまで２，3 年かかります。

□豆類

大豆　下栗の大豆はいろんな使い道があります。まず大豆と蕎麦の葉を使って醤油で似たしょうゆ豆。大豆から作る味噌を使って自給自足生活をしていた。

普通の豆腐とは違った食感の固い豆腐昔ながらのやり方で作った豆腐です。これは形崩れしない弾力があり、そのまま食べても田楽や味噌汁などにも合う、大豆の味と香りが生きているお豆腐です。実際にたべてみたら、結構固く、杏仁豆腐のような食感でした。●小豆　餡子にして蕎麦団子の中に入れて、それをホオの葉で包んで食べたりしました。その他におはぎや赤飯にもなりました。

□畜産

今は行われていないが昔は畜産が盛んで、ウシ・ウマ・ニワトリ・ウサギを育てていた。ニワトリやうさぎはいろんな料理に使われていた。ウシやウマは移動手段や荷物の輸送に使われていた。シカ・イノシシのような動物はジビエ料理としてこの地域の郷土料理となっている。ジビエ料理を出すお店や宿が遠山郷によくある。ウシやウマは食用ではなく移動手段や、荷物を運ぶため使われていました。ウシは生まれた子牛を売って現金収入としていました。

□その他
食べ物とは別ですが昔は養蚕業が盛んでした。今は衰退してしまいました。養蚕を行っていた場所は現在はブルーベリー畑として使われています。
　食べ物などは育てるだけでなく、物々交換で調達もしていました。お金のやり取りではなく人と人とがかかわりあう。これが下栗の言葉で「結」といいます。しかし現在は物流技術が発達して、外から物が届き里内での交流の機会が減ってきています。人口の減少も影響しています。

　本稿から栗の里は多種多様な作物、料理があることが分かった。本稿では下栗の里の食について知ることができたが、今と昔で変わったことの理由や、作物が育つこの地域の環境を、人々の関わりの機会が減ってきていることへの解決策を考えることができなかった。明らかにできなかった。調べられなかった内容を今後の課題としたい。

「遠山郷エコ・ジオパークフィールドスタディ振り返りレポート」

自然コース　麻布大学獣医学部１年　染野　静来

私は、今回初めて参加しました。参加しようと決めた理由は、友人に誘われたからです。大学では動物の勉強をしていますが、元々日本各地の暮らしや言葉に興味があったので、民俗コースを選択しました。長野県には行ったことがなく、遠山郷という地名も初めて聞きました。私の出身は福島県いわき市で、田舎の地域です。そんな私が今回のフィールドスタディを通して理解・実感したこと、テーマに沿って考えてことをまとめました。

民俗コースでは、遠山森林鉄道跡地と木沢小学校を見学しました。当時森林鉄道で働いていた鈴木さんからお話を聞かせていただき、当時鈴木さんが撮影した写真を拝見させていただきました。当時のことを思い出しながら私たちに楽しそうに話してくださる姿から、昔の森林鉄道の活気あふれる様子や仕事仲間と談笑しあう様子が想像できました。鉄道の途中には人工でつくられたトンネルがあったとお話されたので、トンネルが崩れる事故はありましたか？と質問したところ、「なかった。」とお話してくださりました。なぜこんな質問をしたのかというと、私の出身地域では昔、炭鉱が盛んに行われていて、落盤事故がよく起きていたと聞いたことがあったからです。地域の昔盛んだった産業同士似ているものがあると思い、比較しながら森林鉄道のお話を聞くことができました。

木沢小学校は、2 階建て木造建築の小さな小学校で、なるべく当時の状態を残した展示がされていました。私は木造校舎の小・中学校に通っていたので少し懐かしい感じがしました。私以上に、一緒に見学した先生や観光で訪れていた大人の方が懐かしさに浸っていて素敵な空間でした。この日はバイクがたくさん集まり地元の人々が楽しそうに集会を行っていました。木沢小学校では、ここの卒業生である前澤さんにお話を聞かせていただきました。木沢小学校の運営費・維持費は木沢小学校を見学に来た人の募金によるものであり、地元の人々によって管理・運営、展示品の寄付がされていることを知り、驚きました。閉校してしまっても、地元の人々に愛されていることがとても伝わってきました。また、地元の人だけでなく、日本中の人々を懐かしい、やさしい気持ちにさせる遺すべき素敵な場所であると思いました。

鈴木さん、前澤さんにお話しを伺い、共通でお話されていたことは、「自分が育った地域に人がいなくなることが寂しい」ということでした。産業が衰退したことで遠山郷に残る人が減ってしまい、それが子供の減少へつながり閉校してしまったのだと考えます。さらに、若い人が遠山郷から出て行ってしまい、高齢化が進んでいて木沢小学校の管理や、伝統のお祭りを継ぐことができない。とおっしゃっていました。やはり、地方での高齢化や後継者不足は深刻なものだと実感しました。

最後に、「自分が生まれ育ったところに人がいなくなるほど寂しいことはない」これは鈴木さんがおっしゃった言葉です。先ほど述べた言葉と似ていますが、鈴木さんがポロっとこぼしたこの言葉を聞いたとき、私はウルっとしてしまいました。高校を卒業し、地元を離れて暮らす友人や知り合いを多く見てきました。戻ってきた人は片手で数えるほどです。いつか、自分が卒業した小学校、中学校が閉校してしまうのかもしれないと考えてしまい、とても寂しくなってしまいました。2 泊 3 日という短い間でしたが、たくさんの新しいを体験したり、感じたり、考えたりすることができました。シカ肉やイノシシ肉、アユの塩焼きを食べました。とてもおいしかったです。目の前でのサプライズの花火、満天の星空に流れる天の川はとても感動しました。今までにないとても貴重な時間でした。

民俗学コース　麻布大学生命環境科学部１年　比留間　歩実

自分自身が生まれ育った生活環境とは全く異なる地域で 4 日間過ごす中で経験したことを通して、新たな知識や考え方、価値観を身に付けることができた。

まず、歴史を伝承していくことの大切さとその難しさについて学ぶことができた。2 日目に訪れた旧木沢小学校は、森林鉄道を含めた飯田市の文化財を保存・展示することで、地域の人だけでなく、地域や年齢をこえた交流の場として活用されている。母校でこの活動を行っている前沢さんは、森林鉄道がどれだけ貴重な文化財か、またそのような文化財と廃校となった学校を利用しながら地域を活性化できると良いと未来を語ってくれたが、協議会の高齢化や、担い手不足が課題である教えてくれた。他のグループの発表でも同じ課題が挙げられており、様々な場所の課題であると実感した。私たちのフィールドワークに引率してくれた近藤さんは減少している「担い手」となる人である。近藤さんは飯田市の伝統的な霜月祭りのサポートを行う 10 代～50 代で構成される「木沢霜月野郎会」のメンバーである。霜月祭りはコロナのあおりを受け 2020 年、2021 年開催することができなかった。前までのやり方では霜月祭りの存続は難しいと考え、地区の垣根を超えサポートに入るなどやり方を変えることで霜月祭りは復活することができた。近藤さん「幼少期から霜月祭りの文化や方法など上の世代の人から教えてもらっていた。そんな祭りを途絶えることなく他の人に伝える使命がある、祭りは 1 人ではできないそのため祭りを行うことで地域はつながる。」と教えてくれた。近藤さんの話を聞き、地元の人以外も高齢化の進んでいる地域へのサポートを行うことが文化財を守り、それが地域を残すことにつながると感じた。短期間しか滞在しない私たちが担い手不足の課題を解決することは困難であった。しかし、問題の本質と向き合うため、地域の人と話し合う機会を設ける事や、遠山郷の今の実態や実際に行った経験について発信することが、微力ではあるが遠山郷の良い所をたくさん知った私たちができることであり、やらなければならないことであるだろう。

また、大学で専攻している食品学についての学びも得られた。動物倫理のグループの発表で猟師の益山さんは、駆除した鹿を精肉や鹿革を加工、角でアクセサリーを作ることで人間へ、残った部位を共に猟にでる猟犬へ与え、余すことなく利用することで「循環」を作っているという話を聞いた。「循環」を作ることで食品ロスを減らすことにつながるという。私が大学で学んだ食品ロスの解決方法は企業や政府の取り組みなどスケールが大きく、抽象的な方法であった。益山さんは、「解体した鹿もスーパーで売っている豚、2 つの命の重さは変わらないのにも関わらず、スーパーで売っている豚肉は簡単に残し捨てることができる。命の重さを感じ「いのちをいただく」という経験をすることによって簡単に捨てることができなくなる。」という話を聞き、企業や政府の政策に任せるだけでなく 1 人 1 人の考え方を変え「いのちをいただく」という意識を持つ必要があると感じた。

高齢化や担い手不足により地域の伝統的な文化や産業が絶たれてしまうというニュースや、食品ロスの講義で知識を付けた気になっていたが、それはとても狭く一面的な知識であったことを知った。現地に行って実際に体験することで多面的な知識を得られた。しかし、今回は短期間であったためさらに知識を広げるため座ってテレビやパソコンを見るだけでなく、フィールドワークによって知識を身につけたい。

木沢小学校と森林鉄道の動態保存との関係について

民俗学コース　東京農工大学大学院修士２年　陳　佳虹

私たちは梨元ていしゃばから、遠山郷木沢エリアを回って、ぬくもりのある木沢小学校で、森林鉄道の写真を撮影されている鈴木治男さんと、木沢小学校の運営・管理をされている前澤憲道さんに聞き取り調査を行いました。

木沢小学校は昭和 7 年に、地元の人が桑畑を提供し、地域の人々に建てられた木製校舎です。昭和 7 年から平成 12 年まで、68 年間地域の子どもたちを育み続けてきたこの小学校は、地域の中心的存在といっても過言ではありません。地元の人々にとって、木沢小学校はどういう意味をもつものなのでしょうか。統廃合が進み、木沢小学校が閉校を余儀なくされた時、この問いは人々に投げかけられました。その答えは、校舎を保存することです。みんなで建てた学校だからです。ですが、学校というのは、卒業生が離れてゆく、新しい生徒が入ってくるという循環で生きていくものともいえば、生徒のいない学校はどのように活気と成長を可能にするのでしょうか。

前澤さんによると、現在木沢小学校の運営に必要な経費を皆さんの寄付により賄うものです。展示された資料も、地域の昔からのもの、寄付されたものを使っております。もとの校舎の様子を保ち、森林鉄道、霜月祭りなど地域の歴史・文化資料を保存・展示・交流の場として活用しています。

これを実現させるのは木沢地区活性化推進協議会です。木沢小学校の運営だけではなく、木沢地区活性化推進協議会は、その名称通り、この校舎を拠点に地域の歴史文化を伝承し、地域の持続可能な発展を図り、各種の事業を展開しています。

森林鉄道の動態保存はその代表的な事業の一つです。木沢地区活性化推進協議会を中心に地元有志と森林鉄道に思いを馳せる地域外の人たちにより、平成 23 年 1 月に「夢をつなごう遠山森林鉄道の会」が発足し、梨元ていしゃばにおけるレールや機関車の復元、森林鉄道に関わる史料の整理や展示など活動が展開されはじめました。

林鉄の資料収集に大きな貢献を果たした鈴木さんは、林鉄時代に民間の林業会社に勤め、森林鉄道を巡る当時遠山郷の林業と暮しその生き生きとした様子を記録した貴重な写真を残しました。その写真とともに、当時の様子を私たちに聞かせていただきました。鈴木さんの話を聞きながら、梨元ていしゃばで見たレールや機関車が単なる形ではなく、その歴史の厚みを感じるようになりました。過去の人々はどのように暮らしていたのか、その暮しの中にどのような精神をもっているのかを考えさせるきっかけとなり、その実態をもっと知りたいところです。

地域を持続可能に発展させていきたい一つの理由としては、文化の多様性を保つことです。その多様性は、変化していく中で生まれてくるかもしれませんが、その源は地域の歴史文化にあるに違いありません。しかし、歴史文化は風化し、消えていく可能性があります。この意味で、森林鉄道の動態保存は、木沢地区における林業の歴史文化を形にして伝承することも言えます。それが娯楽の道具だけにならないように支えてくれるのは、鈴木さんの写真をはじめ森林鉄道の資料を集めた木沢小学校の林鉄資料室ではないかと思います。

さらに、私たちが見える現在の旧木沢小学校や森林鉄道の復元があるのは、地域の人びとが地域に対する愛着という原動力があることは言うまでもありませんが、木沢地区活性化推進協議会を中心とした地域の学習と討議を重ねた結果といえるのではないでしょうか。

このように、木沢小学校が地域の文化拠点と交流・学習の拠点として、再び地域の中心的存在になるといえるでしょう。共通の記憶を通して地元の人々を結び合い、地域の過去と現在をつな

げ、未来を考えていく場として、新しい発想を生み出し、長く続けていく生命力があると思います。

最後に、課題として考えなければならないのは、地域の歴史文化と地域の持続可能な発展との関係です。その中には、観光の問題や地域の継承者の問題などがあります。その解決の道を探る木沢地域の学習にこれから注目していきたいと思います。

歴史をつなぐ

民俗学コース　松本大学総合経営学部３年　今井　優人

遠山郷の歴史には様々な行事や文化があります。そのなかで、今回着目したのが「森林鉄道」とそれらを後世に伝えていこうと旧木沢小学校を活用している方々です。このレポートでは、フィールドスタディで学んだこと、感じたことを書いていこうと思います。

まず「森林鉄道」ですが、「森林鉄道」は山で切り取られた木を「梨本貯木場」と呼ばれた木を貯めて置いておく場所まで運搬する鉄道です。昭和１５年７月に着工してから昭和４３年１２月まで、約 30 年間「森林鉄道」として多くの木を運搬し、役目を果たしていました。遠山の木というのは質が良く、多くの建造物に利用されていました。その中でも江戸城に使われていたという話もあり、その当時は鉄道がなかったので川を使って木材を運んでいました。そんな「森林鉄道」を利用した民間会社・大建木材に勤務していた鈴木治男さんに我々は当時のお話を伺ってきました。鈴木さんは「森林鉄道」の写真を鉄道が動いていた約 30 年間撮ってきた方で、「森林鉄道」について話す姿はとても真剣で、何も知らない我々に「森林鉄道」について自分が体験したこと、当時の様子などの多くのことを教えてくださり、まさに歴史をつなぐ方だと感じました。

次に、遠山郷の歴史や文化を伝え、残していき、旧木沢小学校の管理・運営をはじめ、森林鉄道など林業遺産を活用した活動をされている前澤憲道さんのお話です。まず「旧木沢小学校」とは、昭和 7 年に建てられ平成 12 年に廃校となった木造校舎であり、遠山郷に住む方々の母校です。木造という今ではあまり見られない校舎の造りになっており、現代の我々には馴染みのない、昔にタイムスリップしたかのような校舎となっています。そんな「旧木沢小学校」を残し、イベント会場や資料館として活用し、地域活性化を目指す方々がいます。それが、前澤さんを含めた、昭和 34 年卒業生によって結成された「やろう集」の方々です。歴史ある校舎を残し、後世に伝えていきたいという思いのある方々があつまり、今の「旧木沢小学校」があります。小学校の中は、当時使われていたオルガンや机、ランドセルといった小学校にちなんだ物をはじめ、「森林鉄道」に関する資料や、鈴木さんの撮られた写真なんかも展示されています。このような備品は地域の方々から寄付されたものが大半となっています。このようなところにも地域のみんなで歴史を伝えていこうという活動が見られます。

今回の遠山郷フィールドスタディで私は、遠山郷について多くの歴史を知るとこが出来たと同時に、それらを伝えていこうとしている方々の活動についても知ることが出来ました。多くの人が色々な方面で活躍し、遠山郷に住む住民が一緒になって遠山郷を盛り上げていこうと、歴史を伝えていこうという姿を見ることが出来ました。私が好きな言葉に「町も人も、みんな家族」というものがあるのですが、遠山郷はまさにその言葉を具現化したものだと思いました。我々も、遠山郷の歴史を伝えていく一員になっていきたいと思いました。

地域の過去と現在、未来をつなぐ人の存在

民俗学コース　松本大学総合経営学部４年　工藤　太陽

今回で遠山郷フィールドスタディへの参加は２回目であった。昨年のフィールドスタディと違う点として、１日目に巡見がプログラムに組み込まれており、遠山郷にしかない貴重な地形や地質について知ることができた。また、２日目は民俗学をテーマにしたグループでフィールドワークを行い、森林鉄道を切り口に、人々が遠山郷でどのような暮らしを営んできたか住民の方からお話を伺った。今になっては、ほとんど見ることができない森林鉄道の軌跡を、住民の方のお話を通して思い浮かべることができた。私が今回のフィールドスタディを通して最も強く感じたことは、地域の歴史や文化、地質などの資源は地域の人によって未来に伝えられ、守られていくことである。以下では、今回のフィールドスタディで得た気づきや学んだことを噛み砕くなかで、地域住民が地域資源を守り、未来に伝えていくことの意味について考えたい。

２日目のフィールドワークでは、かつて森林鉄道を利用した民間企業・大建木材に勤めていた鈴木治男さん、森林鉄道の動態保存、旧木沢小学校の活用に取り組む前澤憲道さんからお話を伺った。鈴木さんのお話では、森林鉄道の写真を撮るために、月給 8,800 円に対して２倍以上の値段がするカメラをお金を貯めて買ったエピソード、鈴木さんのカメラ撮影への愛の強さが印象に残った。カメラは超高級品であるが、それでも森林鉄道を写真に収めたいという鈴木さんの思いがあったからこそ、今私たちは写真を通して、遠山郷の文化遺産である森林鉄道の歴史に触れることができる。地域資源が過去から未来に伝承されるうえで、地域資源を思いを持って記録として残していく人の存在は重要だ。

一方で前澤さんの取り組みは、地域資源を活用しながら守っている点で、鈴木さんとは違った角度から地域を未来へつないでいく役割を担っている。前澤さんの取り組みの中心である旧木沢小学校は、平成 12 年に廃校し、建物は取り壊しの危機にさらされた。しかし、地域のシンボルでもあった学校が、無くなってしまうことに寂しさを感じた住民が集まり保存活動を始め、今現在は、飯田市から指定管理を受ける形で残されている。旧木沢小学校の木造校舎の中には、様々な場所から集められた、地域の歴史や文化を記録する資料でいっぱいだ。前澤さんをはじめ木沢の住民の「学校を残したい」という思いから始まった活動が、旧木沢小学校に学校教育の場以外の価値を持たせ、地域の過去を伝え、未来につなぐ役割を担っている。また、旧木沢小学校はイベントスペースとしての利用も盛んに行われており、遠山郷の人と外の地域の人をつなぎ、新たな遠山郷ファンを生み出していけるような、そんな場所としても機能している。

ここまで、鈴木さんと前澤さんのお話を振り返り、お二人の活動がどのように地域の過去と現在、未来をつなぐ役割を担っているか考えた。前澤さんが「若い人に私たちの活動を引き継いでほしい」と述べたように、遠山郷の過去の歴史や文化を未来につないでいく上で、若い世代の活躍が重要となる。飯田市美術博物館の学芸員である近藤大知さんは、「地域のことは地域の人に教わった。私自身も地域の人の思いを記録し、後世に伝えていきたい」と話し、遠山郷の住民へ聞き取り調査を行い、地域の歴史を記録して伝える研究活動を実践している。これからの地域の担い手は私たち若者だ。だからこそ、地域を先輩から学び、後輩に伝えていく責任を自覚しなくてはならない。まずは、私が住む地域で地域の過去と未来をつなぐ主体となれるように、地域の歴史、そしてそこに住む人について知る活動から始めたい。

遠山郷でのフィールドスタディを通して

動物倫理コース　麻生大学獣医学部４年　清水　彩恵

今回の遠山郷で行われたフィールドスタディでは、事前学習の段階では動物倫理を選択したこともあってか、知っていることを改めて復習をしたような感覚で終わっていた。実際に遠山郷に訪れ実際に趣味や娯楽としてではなく仕事として取り組んでいる猟師の方から直接話を聞くことで、今まで自分が学校で座学として習ってきた内容とは違う感性や考え方や実際の猟師の現状を伺うことができた。動物倫理のコースを選択した時は野生のメスジカを解体して自分たちで食べるとは考えてもいなかったが、１日を通して解体から食べるまで自分たちの手で行うことで「命をいただいて自分たちが生かされている」ということ、「命をいただいたからには無駄なく使うこと」の２点を強く実感できた。

私が不思議だと感じていたのは２点あり、１つは「鹿」という認識と「肉」という認識の切り替わりである。実際、最初に解体前から皮膚をはがすのを体験させていただいたときは「鹿」という認識だったが、四肢が完全に切断され胴のみになった状態の段階では「肉」や「食品」という認識になっていた。頭では「鹿」であることはわかっているのだが、スーパーに売っている状態のように抵抗がなくなる瞬間があるのは不思議だった。今回は益山さんが狩ってくれて血抜きや内臓の処理をし、何日か経っている状態から始めたがこれを狩る段階から見ていたり、自分たちの手で血抜きや内臓の処理をしていた「鹿」と「肉」の認識に変化が生じるのかも気になった。不思議に思った点の２つ目としては野生動物の解体をすることに関して抵抗などのマイナスの感情が自分の中に生まれなかった点である。私は、動物を解体するといったことをした経験は１度もなく、前日に解体をすることを聞いたときは心配の気持ちがあったが解体をしているときはマイナスの感情が発生しなかったことがとても不思議だった。実際、一緒に参加した学生全員が動物の解体経験があったので周りに影響されて大丈夫だったのか、益山さんの手際の良さや話に気を取られていたのかはわからないが、１つ思ったのは、今回解体するメスジカが自分たちのお昼ご飯になることが分かっていたので、人間は自分の生きるために必要だと感じたものには抵抗などの感情が発生しないのかとも考えた。ただ、今回解体作業をさせていただいて今後もなかなかできることではないと思ったため、体験できてよかったとも考えている。

益山さんが話していた「無駄なく使う」ということは自分たちが食べている食料に対して言及しているのだと考えていたが、実際に益山さんのように狩りをして自分たちの手でどこも無駄なく使用するのは厳しいことであると考えているので、私たちができるのは益山さんなどの猟師さんがいることや、益山さんが１日を通して私たちに伝えてくださったことをより多くの人に知ってもらうのが一番だと考えている。今回、私は飯田市が主催してくださったフィールドスタディに参加させていただく機会があり、発表の場を設けさせていただいていたので、少しだが解体をしていない人にも伝わったのかもしれないが、人伝てに聞くよりかは益山さんのような活動をしている方から直接お話を聞ける機会を設けるのが良いと思った。ただ、一番は実際に体験することだと身をもって実感した。私は普段は大学の講義を座って聞いて勉強していたが、座って聞いているだけだと興味がないと聞き逃すことも多く、映像があっても実感がないのでそういうことをしている人がいるのみで終わってしまうことが多い。しかし、実際に参加をし話を聞くことで座学とは違う考え方や現状を知ることができ、実際に体験することでより話の内容もすんなり入り理解することができたので、体で体感をすることは大事なのだと改めて実感した場だった。

遠山郷エコ・ジオパークフィールドスタディ振り返りレポート

動物倫理コース　麻布大学獣医学部３年　増田　桃子

今回の遠山郷エコ・ジオパークフィールドスタディ（以下 EG-FS）で私が感じた最大の成果は「新しい側面からの動物との関わり方」と「様々な方々との新たな繋がり」であると感じる。人間と野生動物との間において活動する「猟師」という仕事の意義と責任、普段は違う場所で暮らし、異なる分野を学ぶ他大学の学生や地元の高校生、遠山郷で実際に暮らす方々など、今回の EG-FS に参加しなければもつことができなかった「繋がり」を私はこの EG-FS で実感することができた。

今回、私が選択した動物倫理では、遠山郷で猟師として活躍する益山勝人さんにお世話になり、動物が肉へと変わっていく過程や、獲る者の責任、食べる者が常に念頭に置かなければならない現実について自らが行動しながら学んだ。私自身、農業高校出身であったため、動物の解体や食肉になるまでの流れはある程度は理解しているつもりであったので、シカの解体を行うと聞いた際に抵抗感などは全くなかった。しかし、これまでの経験と今回の体験は全くの別物であった。鶏とシカでは鳥類と哺乳類、二本足と四つ足という部分が異なり、解体という行為に対して少し罪悪感を覚えた。そんな時、益山さんにこう問いかけられた。「二本足の鶏と四本足のシカで何故感じ方が変わるのか？どちらも同じ一つの命には変わりない、なぜだろう？」私はそのとき、人間は無意識に命を大きさで計っているのではないかと感じた。シカは鶏よりも大きく、体格は人に近い。鶏を殺すのと虫を殺すのは同じ行為であるが、「命」という観点では何も変わらない。私が益山さんの言葉で印象に残っているのは「こうやって経験すると人間がいかに残酷なのかに気付く。しかし食べるためには動物は殺さなければいけない。それならば動物に感謝して最後まで余すことなく使う、それが獲る者、食べる者の責任」という言葉である。普段スーパーなどに並んでいる食肉も元は動物であり、見えないところでシカの解体のような過程を経て、食卓に並ぶ。今回のフィールドワークで私は改めて、動物の命を頂くことに伴う人間の責任と無駄なく使い切ることは動物へ敬意と感謝を示すことと同義であると考えた。またこの経験を、最終日に行った「地域成果発表会」のような形で体験していない第三者へ伝える、インタープリテーションをするということは、狩猟やジビエ、動物の命を頂くという経験と大切さを発信する機会としても、自分たちの経験をより深く理解しなおすことにも繋がったため、非常に有意義な時間であったと感じる。今回の EG-FS では、命の大切さと同時に「学びは机上の知識だけでは不十分であり、経験をして初めて本当の理解に繋がる」ということを強く感じた。知識として「命は大切なので獲る者・食べる者には使い切り無駄にしない責任がある」ということは重要だが、それらは自らが経験することで本当の学びになる。私自身、シカの解体前と解体後で「命の重要性」をより深く実感することができた。

また、動物倫理でのフィールドワーク以外にも今回の EG-FS では、沢山の方々との関わりの中からも実感すること、考えさせられることが多かった。違う分野を学ぶ他大学の学生との交流や、地元の高校生がもつ遠山郷への考え方、各学校から来られていた先生方との対話、飯田市役所の方々の EG-FS に対する熱意、遠山郷に暮らす方々の遠山郷への想いなど、様々な方向から今回の EG-FS に対する考え方や自分自身のこれまでの経験から感じること、将来の話、大学での日常、趣味の話など、この EG-FS がなければ一生会うことがなかったかもしれない方々との交流が私にとって、非常に貴重で有意義な時間であった。

今回の EG-FS への参加は、「経験」についての重要性や、他者との関わりから得た新たな学びは自分自身を見直すきっかけになる、ということを改めて感じさせてくれた。また機会があれ

ば、来年度もEG-FSに参加させて頂き、今度は前回の経験があり過程や意図を知った自分が、次は野生動物を殺し、解体することに対してどのように感じ、受け取るのかを経験したいと考える。今回の経験は、このEG-FSを知らない方々に発信することで、私のように新たな学びや考え方を得るきっかけを得ることに繋がるので、第三者に伝えるというような機会があれば、積極的に発信していきたいと考える。

遠山郷エコ・ジオパークフィールドスタディ振り返りレポート

動物倫理コース　松本大学総合経営学部３年　城取　七音

今回９月 16 日～18 日まで「遠山郷エコ・ジオパークフィールドスタディ」に今回はゼミの一環で参加しました。ここで私は動物倫理コースを選択し地元猟師の益山さんのもとで、命をいただくということを改めて学ばさせていただきました。

初日は、午後から遠山郷に集まり、全体がマイクロバスで移動し、遠山郷の隕石クレーターであろう場所での説明やフォッサマグナやプレートなど日本でおそらく遠山郷でしか見られない光景や日本だからこそ見られる光景なども説明付きで受けました。そこでは縞模様のようになって圧力により波打ったようになった地層を見て触ることができ、普段ではあまり見る機会のない光景でした。初日はその後、三日間お世話になる「いろりの宿島畑」にお邪魔しました。そこでは、二日目にコースをともに学ぶメンバーとの顔合わせや明日、益山さんに質問したい内容などを決めました。初日はこのように遠山郷というものを改めて知ることで終了しました。

二日目は本番といってもいいでしょう。この日、自分は動物倫理コースということで、地元猟師の益山勝人さんのもとで、実際に遠山郷で狩られた鹿を自分たちの手で解体するところから、料理をして食べるところまで体験しました。まず、解体では益山さんに手本を見せてもらいそれに習い、鹿の頭と足を落とし、皮を剥ぎ、各部位ごとに切り分けていく作業を他メンバーと分担しました。私はヒレの部位を切り離すことと、肩甲骨と肉を切り離す作業を行いました。私は高校時代に鹿を解体するところを何回か見ていたため、抵抗感などはさほどありませんでしたが、益山さん曰く、過去には 10 人中 2 人しかその後調理した肉を食べることができなかったこともあったそうで、そういったことに関して、

益山さんは口癖のように「人間って非情だよね。」とおっしゃっていました。確かに肉になったからこそ自分でも食べることができました。しかし部位ごとに切り分けられたものと、まだ鹿の原型をとどめていたものを見てどっちが食べられるかと言われたら迷いもせず部位ごとの肉を選ぶでしょう。そう言った面ではやはり自分も非情なのだと実感しました。その後、自分たちで切り分けた部位で特に貴重な部位であるヒレとロースをいただきました。ヒレはカツにロースをカレーにして食べました。ヒレカツ益山さんの奥さんが揚げてくれたのですが、肉はとても柔らかく自分が知っているジビエとは全く違いました。カレーは自分たちで作り食べました。益山さんに食事中に質問などそしていて話の中で、「食べることは生きること」とおっしゃっていて当たり前のことだけど、現代の人が当たり前すぎて忘れがちの、命をいただくことへの感謝の気持ちを今一度実感できました。また、鹿の角を加工しキーホルダーを作らせていただきました。こういった鹿を捌く際に出る骨や内臓なども猟犬の餌や研究材料などにすることで余さず使い切るという大切さも実感しました。そして二日目は改めて命の循環や狩る側、食べる側の責任ということを改めて学ばせていただきました。その後 2 日目は宿に戻り、一時間の講義のあと二日目のまとめを行いました。

三日目は、フィールドスタディの成果報告を行いました。私たちは益山さんの話しの中で何に注目して成果発表を行うか悩みましたが、「循環」をテーマとしました。これは山などの恵みや今回の鹿なども循環してまた自分たちが生きていく糧となるこのようにして自然は廻っていくと私は感じました。その為模造紙にも矢印で円を描き循環のイメージを作りました。その後、今回指導していただいた益山さん含め他のコースでお世話になった講師の皆さんや地元の人々へ成果報告を行いました。自分たちは初手の発表ということでかなり緊張もしましたが、無事成果報告

を行えたと思います。その後、他コースの成果報告を聞きました。他コースもこのフィールドスタディで様々なことを学んだことが分かる成果報告会でありました。

今回の「遠山郷エコ・ジオパークフィールドスタディ」では本当に学ぶことが多く、特に自分の中では命ということを扱うことで起こる責任や普段から命をいただいている側として感謝の気持ちを忘れてはならないことなど改めて実感し学べたと思います。

「生きることは楽しむこと」　～遠山郷での学び～

動物倫理コース　下伊那農業高校２年　北原　彬子

私はこの度、学輪 IIDA 共通カリキュラム遠山郷エコ・ジオパーク FS に参加させて頂きました。担任の先生を通じて学輪 IIDA を知りましたが、勧められた当初は、人見知りのため参加を躊躇していました。友達 を誘い、事前学習会に参加したところ、地元の高校生は同じ学校の友達 1 人と他校の男子生徒 4 人の み、その他は年齢も住んでいる所も全く違う大勢の大学生ばかりで、本当にやっていけるのだろうかと不安が募るばかりでした。それと同時に「私の知らない飯田市をもっと知りたい」、「遠山郷について学びたい」と思い始めたのも事実です。

コース選択の際、どのコースにも興味が湧きましたが、一番心を惹かれたのは動物倫理でした。私は農 業高校に在籍しており、授業で動物について学ぶことがあるので、このフィールドスタディでの学びが学 校の授業でも何か活かせられるのではないかと考え、動物倫理を選択しました。フィールドスタディ当日、 動物倫理のグループは地元猟師の益山勝人さんにキーパーソンとなって頂き、フィールドワークを行いました。益山さんは猟師歴 22 年のベテランだと伺い、とても驚きましたが、それに加え、益山さん自身長 野県の出身でないことに更に驚きました。鹿児島県から移住し、遠山郷の魅力を感じながら生活されて いることに同じ飯田市民として嬉しく思いました。フィールドワークではまず、益山さんが狩ったシカを一つ一つ丁寧に教えて頂きながら自分達の手で解体をしました。私自身、学校の授業でニワトリをヒナから 育て、屠殺、解体をしたことがあったので、今回のシカの解体にも興味がありました。シカはニワトリよりもかなり大きく、初めての解体でしたが、益山さんの丁寧な指導のお陰できれいに解体することができました。益山さんのようなベテランの猟師さんは、一体のシカを 15 分程で解体することができると伺いましたが、今回、私達学生が主体となって解体を体験させて頂いたところ、計 2 時間程要し、ベテラン猟師さんの腕の素晴らしさに感銘を受けました。私はジビエに対し、勝手な先入観で「硬い」、「臭い」といったクセのある肉だと思っており、あまり良い印象を持っていませんでした。しかし繊細なジビエ肉は、一次処理の方法によって味や食感に明確な違いが出てくると教えて頂きました。適切な処理がなされたジビエ肉は旨味が濃く、柔らかいのが特徴であるということを学び、私の想像していたジビエとかけ離れていました。 益山さんの適切な処理のお陰で、初めてのジビエは食べやすく、とても美味しいものをいただくことができました。「いのちをいただく」ということの意味を大切にして活動されている益山さん。解体したシカは、余すことなく最後まで利用するとの事。肉は人間が頂き、毛皮は加工してレザー用品に。角はストラップなどにしており、私達も解体をした後に作らせて頂きました。人間が食すことのできない骨などは飼育している猟犬の餌として与えたり、頭部は猟犬に与える他、大学の研究用として利用されることもあると聞き驚 きました。このように、狩猟した命を余すことなく色々な用途で最後まで利用することで、命の尊さやありがたさを改めて実感することができました。「生きることは食べること」「生きることは楽しむこと」。益山さんが仰っていた言葉です。この言葉は私の心に響くものがあり、私は生きていく中で大事にしようと決めまし た。

元々は参加を躊躇していた学輪 IIDA でしたが、フィールドワークを通して不安もなくなり、親切な方々のお陰で輪に入っている自分に気付きました。大学生と一緒にまとめ作業をすると、考えの違いを実感しました。高校生と物事の考え方が違い、参考になる事が多くありました。また、抜群の先導力のお陰でとても頼りがいがあり、心強かったです。成果発表の際も堂々と聞き手に伝わりやすいように話している姿にとても尊敬しました。大学生の姿は私にとって目標の姿となりました。今回、学輪 IIDA に参加して様々な経験ができたことは、自分にとってとても大

きな財産となりました。内容の濃いスケジュールで多忙でしたが、とても充実しており、心に残る楽しい時間でした。この 3 日間は私にとって宝物です。貴重な思い出をありがとうございました。全ての出会いに深く感謝申し上げます。

たくさんの人との出会いがあった学輪 IIDA

動物倫理コース　下伊那農業高校２年　西尾　咲輝

私は、自分が住んでいる飯田市内に遠山郷があることは知っていたけど、行ったことがないし、どういう ところなのか知りたいなと思い学輪 IIDA に参加することを決意しました。ですが、事前学習で講師の先生 のお話をお聞きし、日本で初めての隕石クレーターが遠山で発見されたことや、遠山の小学校に他の学 区からも通える制度があるなどのことがしれたのと同時に、難しい内容のものが多く私が参加して大丈夫 だったかな？と最初はとても不安でした。また、動物倫理の事前学習の際に最後に自分の感想を簡単に、短くていいのでお話してくださいと言われた際、頭の中ではどんなことを言おうか簡単には決まっていたのに、緊張してしまって言葉がうまく出てこなくて思っていたことと違うことを言ってしまいました。人前でお話したり即興で言う事を考えて発表することは、とっても難しいなと感じました。

FS 当日は、今までリモートで会話していた方々と初めて面と向かって会って、緊張と同時にとてもワクワクしました。一日目の夜に動物倫理のコースを選択したメンバーで自己紹介しました。はじめましての大学生の方々とお話するのはとても緊張したけど、趣味や好きなものをお話したり、チーム名を決めるときにこの人はこういう方なんだなとか、チーム名のブレーメンに辿り着くまでにした会話がとても楽しかったです。そして、二日目にチームブレーメンで鹿の解体を体験させてもらいに行きました。学校で何度か鶏の屠殺を経験したことがあるので鹿を解体するのは大丈夫でしたが、鶏よりも大きい鹿を殺す瞬間を見る機会が今回あったとしたら私は耐えられなかっただろうなと思うくらい死んでしまっている鹿の首を切る瞬間はだいぶ恐ろしかったです。ですが、益山さんが言う通りだんだん私達が普段食べている肉に近いカタチになっていくにつれて最初にあった恐怖というか可哀想だと言う気持ちは薄くなっていきました。やっぱり「動物」ってカタチをしているよりも、「肉」ってカタチをしていた方が残酷なキモチにならないのかなと考えました。そして、自分たちで解体した鹿の肉を使ってカレーを手作りしました。やっぱり自分たちでさばいた鹿肉を使って作ったカレーはとっても美味しかったです！カレーを作っている最中に大学生の方々に大学ってどんな感じなのかとか、たくさんお話ができてより仲良くなれた気がしたので良かったです。また、益山さんの奥様が作ってくださった鹿のヒレカツも柔らかくて臭みも全く無くて食べやすかったです。鹿肉はなんとなく先入観で臭みがあるイメージだったけど、益山さんの処理のおかげでとっても美味しく鹿肉をたべることができました。更に益山さんの凄いところは、鹿の資源を「余すことなく」使っていることです。骨は狩りに連れて行っている猟犬に与えていて、頭は猟犬や大学の研究に活用していて、角や皮はクラフトでストラップを作るのに活用しています。とっても楽しくストラップをつくることができて、楽しく鹿の資源を活用できるのはとても素敵なことだなと思いました。

最後の成果発表などを通して、人前で話したり、知らない人と会話するのがとっても苦手だったりした私が、積極的に自分から話しに行くことができるようになったり、人前で話すことがたいしたことないなと思ったり、とても成長できたなと感じました。また、鹿の命や資源を余すことなくいただいて、命に感謝することの大切さを改めて感じることができたので、簡単にご飯を残したり、好き嫌いして食わず嫌いしたりするのをやめようと思いました。

とても忙しくて濃い、今までで１番充実した３日間になりました。貴重な体験をさせていただき、本当にありがとうございました！

遠山郷エコ・ジオパーク FS からの学習

☆とクレーターコース　都留文科大学教養学部１年　山本　洸聖

私は、今回の遠山郷エコ・ジオパーク FS へと参加したことで南アルプスや遠山郷を天文学、地質学的な視点から観察し様々なことを学び、発見することができました。その中で私が最も興味を持ったのが御池山クレーターです。御池山クレーターは今から約２～３万年前に御池山に衝突した隕石によってつくられたクレーターであり、日本で唯一のクレーターでもあります。当日の FS では、御池山クレーターは不自然な凸凹とした地形や隕石の衝撃による石英の構造変化、周辺の岩石の割れ目の方向、重力異常などのさまざまな証拠と坂本先生はじめ多くの方々の研究と努力によって発見されたものだと学ぶことができました。また、実際に現地のクレーターを観察した際、凸凹とした地形やクレーター周囲の岩石の割れ目の方向などを間近で見ることができ、クレーターの大きさやその証拠を実感することができました。しかし、この御池山クレーターにも調査が不徹底である点や研究の後継者不足などの課題を抱えており、これらへの対策なども必要だと感じました。その他にもしらびそ高原から見ることのできる星空や南アルプスの地質等も学ぶことができました。標高約 1,900m のしらびそ高原からは普段見ることのできないような美しい星空も観察し、しらびそ峠を通じて南アルプスを形成する石灰岩、チャート、緑色岩などの実物を見ながら学ぶことができました。そうした中で南アルプスは海洋由来の岩石と陸上由来の岩石の双方が混ざり合って形成されていることがわかり、とても独特な地質構造をしていると感じました。また、実際に実物の岩石を観察したことでそれぞれの岩石のできた環境や経緯などを実感しながら学ぶこともできました。

こうした FS を通じて私は現在大学で学んでいる地域社会をテーマにこの遠山郷、しらびそ峠について考えました。まず初めに御池山クレーターについてです。御池山クレーターは日本で唯一のクレーターであり、そのほかの地域では見ることのできないことから遠山郷、しらびそ峠などの地域のアイデンティティとしての活用することができると感じました。御池山クレーターを活用することで、地域の活性化を図り下栗などへ移住をする人も見つけることができるのではないかと考えます。また、御池山クレーターを活用することで御池山クレーター自体の知名度も向上し興味を持つ人も増え、現在課題となっている研究の後継者不足を解決し若い人材によるより徹底した調査を行うことができるのではとも考えます。続けてしらびそ高原から見ることのできる星空についてです。この星空についても標高約 1,900m というしらびそ高原だからこそ見ることができる地域のアイデンティティであり、星空という季節によって変わるものであるからこそ季節ごとの星空に合わせた観測会などの開催も可能ではないかと考えました。また、この美しい星空は標高約 1,900m という特別な環境のほかに建物の電気を消すなどの光害対策が行われていることで観察することができているため今後も光害対策を継続してゆくことが必要だと感じました。最後に南アルプスの地質についてです。南アルプスの地質は海洋・陸上双方の岩石によって形成され複雑に入り組んだ構造をしており、多くの岩石が地表へ露出しているため地質学や地層の研究・実習の現場としてこの上ない環境ではないかと考えました。また、南アルプスには中央構造線をはじめ複数の断層が存在しており、これもまた南アルプスの地質学的な利点であると感じました。

以上のことが私が今回の遠山郷エコ・ジオパーク FS で学び実感し考えたことです。私は今回の FS へと参加したことでそれぞれの地域特有の資源やアイデンティティを改めて考えることができ今後の大学生活における学習で今回学んだ地域資源やアイデンティティの在り方を基により深い学習へ取り組みたいと考えました。

遠山郷ＦＳ　事後レポート

☆とクレーターコース　松本大学総合経営学部４年　信樂　大

今回行われた遠山郷フィールドスタディで私は、「☆とクレーター」のグループに入り遠山の自然を地学的な視点から見ていった。私は昨年のフィールドスタディにも参加していたが、その時は初参加だったことやテーマが難しかったこともあり、最終日の発表があまりうまくいかなかったため、今回もとても不安だった。しかし、先生方の丁寧な解説、グループでの活動のしやすさなどにより昨年より内容の濃いフィールドスタディになったと感じる。

一日目は、バスで遠山の全体像を確認した後各グループに分かれて活動を行った。私は☆とクレーターのグループで、この日の夜はしらびそ高原にて星空観察を行った。私の実家でも星空をある程度見ることができるが、この時見た星空は今までに見たことのないほどきれいなものだった。また、普段見る時は解説などがないためどれが何の星というのが分からないことが多い。しかし今回は大石先生による事前の講義やレーザーポインターを使った解説、双眼鏡・望遠鏡をつかってより星に近づいて観察することができた。この中で私たちのグループでは、普段から星の目を向けると同時に、光害についても考え、普段私たちがどれほどきれいな空の下で生活しているのかを自覚し、少しでもきれいな星を見るために、無駄な電気を消して少しでも光害による影響を減らすことが大切だと考えた。

二日目は、坂本先生の案内で御池山の隕石クレーターの紹介と南アルプスの地質についてポイントを巡りながら解説していただいた。私は今まで、何回かクレーターや遠山の地質についてお話を聞いてきたが、そのすべてが違った視点からの説明であり、今回も今までに聞いたことのないものだったためとても面白いものだった。この中で坂本先生は、南アルプスはとても広く、まだまだ研究途中のものが多いということを仰っていた。そして今後それを担っていくのは私たちであるということもお聞きした。また、今までいろいろなお話を聞いてきて改めてこの遠山、南アルプスの地質がとても特徴的で面白いものということが分かった。しかし、クレーターや中央構造線による独特な地質は、地学資料としてはとても面白いが、地学がそもそもマニアックであるということもあり、あまり知られていないのが現実だ。私たち若者に求められているのは、新たな発見だけでなくそれを広く、長く伝えていくということも大切になってくると感じた。

三日目は私が最も心配していた成果発表会だ。今年のフィールドスタディはコロナによる規制が緩和されたことにより、グループごとの活動がしやすく、情報交換やその日のまとめがとてもスムーズにいくことが多かった。また、同じグループの人たちは私以上に真剣で楽しそうにしていたのがとても印象的だった。私は最初分野が分野なので心配だったが、気になったことはメモ、質問をしていたことで、伝えたいことを端的に伝えることができたと思う。

今回のフィールドスタディを通して私自身課題と感じたのは、言われたことに対して疑問を持つということだ。私は言われた情報に対してその情報のみで納得してしまい、そこから話題を広げたり、知識を深めていくことが苦手だ。今回のフィールドスタディでも先生方に教えていただいたことに対して「なるほど」と思うだけで、なぜそうなっているのかなどそこから話題や知識を広げていくことがあまりできなかった。これから卒論を書いていく上で今ある情報にどれだけ厚みを出していくかが大切になってくると感じる。そのためにもすぐ納得するのではなく、なぜそうなるのか、本当はこうではないのかといった疑問を大小関係なく見つけていくことが重要だと感じる。

無いものを有るものに…

☆とクレーターコース　阿南高校３年　藤本　春希

先日はお世話になりました。遠山郷フィールドスタディは先生の紹介で知り、僕自身いろんなことを体験してみたいと思い今回参加しました。

僕のコースは☆とクレーターということで、大石先生と坂本先生の現地でのレクチャーを受け、星空や地形など遠山の魅力を学びました。

天体観測については、僕は田舎の方で暮らしていて家でも星はよく見えます、しかし、しらびそ高原の星はより鮮明でさらに事前の学習を受けたことで、いつも星をみているものとは違った感覚で見ることができ、とても感動しました、また現地でのガイドさんがその場で説明解説をしてくれたことで天体観測が詳しく深く理解ができました、こういった観点からガイドさんの確保が地域の魅力を伝え繋いでいく重要な役割であると感じました。しかし一方では、冬シーズンはこうした夜空の体験が難しくなっていきます冬ならではの地域の特徴を生かした観光というものが今後の課題になっていくと考えます。

次に南アルプスの地質とクレーターについてです、しらびそ峠を境にさまざまな断層で分かれており、日本中の山脈でも最も特徴をもつ山々です、遠山に住む人たちに対して、こんなにも傾斜があり複雑な地形になってるのに村を作り生活を営むことができている事実に驚きました、現地で暮らす人々は資源の使い方や文化、食事など、その地域にあった活用が暮らしを支えているのだとわかりました。

クレーターについては、日本で初めて発見されたクレーターということで事前学習を受けた時から興味を持ちました。石英や断層の割れ目などといった証拠からクレーターであると証明されたことがわかりました。ですがその背景には第一人研究者である坂本先生の努力と成果があります、そもそも日本におけるクレーターは探して見つかるようなものではありません、地質を専門とする研究者が小池山周辺の地形に疑問を持ちその周辺を調べたら奇跡的にクレーターであることに繋がった→まさに坂本先生は「何かに対して疑問をもつ」ことが最大の着眼点であり、研究者とは無いものを有るものに…0 を 1 に変える、そういった成果が最大の目標であるとおっしゃっていました、僕はこのことにとても理解ができました、また現地でのレクチャーを受ける中で研究を引き継いで欲しいという若者への想いが強かったです、さすがに研究の引き継ぎまではできませんが、「アルプス山脈の小池山には日本唯一のクレーターがあるんだよ」と発信していきたいです、このように研究を継いでくれる担い手が今後の課題になっていくと考えます。

最後にグループワークではみんなで習ったことを共有し構成、模造紙を完成させました、作業が終わった後は部屋の人たちで大富豪をして遊びました結構楽しくてよかったです、最初は緊張しましたが案外話せて良かったです、人と何かを共有しあったり、意見交換したりするのはとても楽しかったです。

もう一つこのフィールドワークで学んだことはインタープリテーションについてです、例えば何かを発表する際一方的ではなく聞いている相手が「へーそうなんだ」と理解してくれるよう、自分で解釈し問いかけたり双方の関係を意識することです、今後僕がまた何かを教えたり発表したりする時このインタープリテーションを思いだし相手により理解をしてもらえるよう頑張りたいです。

このように今回のフィールドスタディを通じて他校同士の交流やコースごとの知識や歴史を学び、遠山郷にはこんな魅力があるんだよと少しでも広みたい家族や知り合いに話してみたいです、またこういった人との関わりというものを大切にしていきたいと思います。

0から1に

☆とクレーターコース　阿南高校３年　松下　穂路

先日は大変お世話になりました。この3日間を通して、いろいろなことを体験し経験させていただきました。

今回この遠山郷フィールドスタディに参加したきっかけは、僕と同じ阿南高校の参加者である藤本春希くんに声をかけてもらいいろいろ説明してもらいました。その時に自分も興味を持ち参加することを決めました。

いくつか興味深いコースがあるなかで、僕とはるきくんは★とクレーターコースに参加させていただき、遠山郷の星の美しさ、特徴的な地形、地層を体験を通して学ばせていただきました。またより深く探求していく上で、★とクレーターコースの大石先生と坂本先生に3日間一緒に過ごしながら貴重なお話をお聞きさせていただきました。

この3日間を通して一番印象に残っているのが一日目の夜に行った天の川での天体観測で、普段僕たちが住んでいる地域でも綺麗な星を見ることが出来ますが、私が住んでいる地域との標高差が約1500mあり普段見ている星と全く違うとても美しい星を見ることが出来ました。標高差によってこんなにも星の見え方が違うのかと驚きと興奮でいっぱいでした。また私は見逃してしまいましたが、はるきくんは流れ星を見ることが出来ていて羨ましく思いました。現地のガイドさんの解説も興味深くレーザーポインターを使いとても分かりやすい説明で星の位置や星座を詳しく見ることができ、知らなかったことをたくさん学ぶことが出来ました。事前学習で星を写真で見せていただきましたが生の星空は比べ物にならないくらい綺麗で、本当に行ってよかったなと思ったのと同時に、なぜこんなにも、 普段の星空と違いが出るのかが気になり大石先生に聞いたところ、街中の明かりがあるかないかが見え方に違いが出ると言うことをお聞きし、大変勉強になりました。

クレーターでは、日本で初めて発見されたということでとても興味をそそられました。その根拠と証拠に、断層の割れ目の方向によって分かったというのが驚きです。坂本先生が調べなかったらわからなかったかもしれないと思うと、坂本先生の偉大さが分かります。しかし坂本先生は、まだまだ一部分しか調べられていないので若者たちがこの先いろいろ調査や研究を続けていけば、新しい発見をすることができるとおっしゃられ、自分たちにできることを率先して行っていきたいなと思いました。

このとても特徴的な地形を持つ遠山郷に焦点を当てて調査、研究をするにあたってまだ何も分かっていない時期に研究を開始した坂本先生は0から1に変えたすごい方で、とてつもない知識量と経験を話していただき、とても勉強になりました。

もうひとつ私には印象に残ったことがあります。それは3日間生活を共にした、2人の大学生です。少し緊張気味の僕たちに声をかけて頂き雰囲気を和ませたり、昨年のフィールドスタディのお話をしていただきました。特にすごいなと思ったことが、3日目の成果発表会の時です。じぶんたちは準備がギリギリなってしまったこともあり発表の準備があまりできていませんでした。しかし先輩方は台本もないのにペラペラと堂々と喋っていて本当にすごいと思いました。他のグループの方もそうでしたが言葉選びが的確で、とても分かりやすくてすごいと思いました。ほとんどアドリブにもかかわらずそれを感じさせないところがさすがだなと思いました。

この3日間を通して普段関わることができないような方と体験を通して関わることが出来てとても濃い3日間でした。貴重な体験も沢山させていただいて本当に楽しかったです。ありがとうございました。